

教職大学院

Newsletter No. 209

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2026.7.25(公開版)

「平和な楽園」とともに

福井大学教育学部附属特別支援学校

校長 田上 博一

福井大学教育学部附属特別支援学校の校舎には、虹色の画家として知られる 薺嘔（アイオウ）氏がデザインした「平和の楽園」の壁画があります。縦5メートル、横11メートルの硬質磁器タイルモザイクで表現された色鮮やかな作品は、遠くからでも人々の目を引きま

す。私も以前この学校を訪れた際には、「大きな壁画だな」「きれいだな」という印象を抱く程度でした。しかし、勤務するようになって毎日この壁画を目にする中で、その豊かで鮮やかな色彩から自然と元気をもらっていることに気付きました。

本校は、この壁画に描かれた世界のように、明るく自由で、互いを認め合い励まし合いながら、一人一人が力いっぱい生きていくことのできる学校を目指しています。

子どもたちは毎日この壁画を見ながら登校してきます。朝、校門に立って迎えていると、笑顔で「おはようございます」と声をかけてくれる子もいれば、ちらりとこちらを見て足早に校舎へ向かう子もいます。そんな何気ない日々を積み重ねながら、一人一人との関係が少しずつ深まり、新たなつながりが生まれていくことを願っています。

本校は1971年（昭和46年）に、知的障害のある児童生徒を対象とした附属養護学校として開校しま

した。知的障害を対象とした学校としては福井県で最初の学校です。小学部・中学部・高等部の12年間を見通した一貫教育を行っており、2026年4月現在、53名の児童生徒が在籍しています。異年齢集団による学級編成のもと、多様な人との関わりや豊かな経験を大切にした教育を実践しています。

この学校の教育の柱は「生活教育」です。生活教育とは、子どもたちにとって身近で必然性のある生活そのものを学びの中心に据え、将来の自立と社会参加に必要な力を育む教育です。

小学部では身辺処理や日常生活動作の向上を目指しながら、文字や数、言葉を学びます。中学部では生活技能や教科学習、芸術・体育活動を通して、生活に必要な力と主体的に物事に取り組む態度を育てます。高等部では職業学習を中心に、「はたらく喜び」を実感しながら社会参加に向けた力を育成しています。

内容

巻頭言	(1)
院生自己紹介	(3)
5月カンファレンス	(20)
週間カンファレンス・インターン	(26)
コースだより	(31)
特集	(39)
その他	(44)

近年は、障害のある人の権利や自己決定の尊重が重視されるようになり、「できるようになること」だけでなく、「自分で選ぶ」「自分で決める」「自分らしく生きる」ことを支える視点も大切にされています。本校では、一人一人の子どもが主体的に生活をつくり、周囲と協力しながら社会の一員として生きていく力を育むことを目指しています。生活教育は、日常生活の自立を支える教育であるとともに、子ども一人一人のウェルビーイングの実現を目指す教育でもあります。

また、本校は大学附属学校として、知的障害教育の充実、教員養成への貢献、教育研究の推進、現職教員の研修支援という四つの使命を担っています。その使命を果たすためには、教職員一人一人が学び続けることが欠かせません。大学との連携を生かした研究・研修の充実や、教職員同士が学び合う文化を育むことを通して、学校全体の教育力向上を図っていきたいと考えています。

校長となって楽しみにしていることの一つに、本校の開校以来の歩みが記された年報を読むことがあ

ります。第1号の年報には、研究に関わる24回もの討論会の記録が掲載されていました。そこには、子どもたちのよりよい学びを願い、率直に意見を交わしながら研究を深めていった当時の先生方の姿が生き生きと記されています。その記録を読みながら、学校づくりや教育の営みは、人と人との対話の中で育まれるものだ改めて感じています。私自身も、子どもたち、教職員、保護者の皆様、そして大学や地域の方々との対話を大切にしながら、本校の教育をさらに発展させていきたいと思っています。

「平和の楽園」の壁画が象徴するように、多様な個性をもつ子どもたちが互いを認め合い、支え合いながら、それぞれが自分らしく輝き、成長していく。そのような学校であり続けることが本校の願いです。開校以来受け継がれてきた教育の理念と実践を大切にしながら、子どもたち一人一人のウェルビーイングの実現を目指して歩んでまいります。

機会がありましたら、ぜひ本校を訪れ、「平和の楽園」の壁画と、そこで学ぶ子どもたちの笑顔に出会っていただければ幸いです。



院生自己紹介



学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/福井市六条小学校

鳳 万寿弥（おおとり ますや）

教職大学院に通うようになってから、私は改めて「どうして教員になったのか」「教員としてどのような子どもを育てたいのか」「どんな学校をつくりたいのか」といった問いに向き合うようになりました。これまでの私は、日々の授業や事務作業に追われ、そのような問いについて立ち止まって考える余裕がなかったのだと思います。

振り返ると、私は小学生のころから学校が大好きでした。当時は土曜日にも授業がある「半ドン」の時代でしたが、私が5年生のときに土曜日が休みになり、むしろ残念に感じたことを覚えています。それほどまでに学校が好きだったのです。

教員になりたいと考えるようになったきっかけは、6年生のときに見たテレビドラマ「打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？」でした。主人公は小学生の子どもたちで、ひと夏の青春を描いた作品なのですが、私が心を動かされたのは、その主人公の子どもたち…ではなく脇役の担任の先生でした。「私の大好きな学校という場所で、子どもたちの青春の瞬間を間近で見守り、支えられる仕事があるのだ」と知ったとき、教員という職業がとても魅力的に映りました。

このように振り返ると、私は“勉強を教えたいから”教員になったものではありませんでした。子どもたち

に、今しかできない経験をしてほしい。一生の宝物になるようなかけがえのない時間を共に過ごしたい。そんな学校をつくりたい。その思いこそが、教員を志した原点だったのです。

いま私が特に学びたいと感じているのが、総合的な学習の時間を中心とした探究的な学びについてです。かつての私は総合的な学習の時間が苦手でした。教科書もなく、何をしてもよいのか分からなかったからです。しかし、実践を重ねる中で、その時間は「何をしてもいいか分からない時間」から「何でもできる、可能性に満ちた時間」へと変わっていきました。

総合的な学習の時間には、子どもたちが課題を見つけ、仲間と協働し、試行錯誤しながら答えを探していく豊かなプロセスがあります。自分たちの行動が社会とつながり、世の中をよりよく変えていくことができるのだという実感を得られる点に大きな価値があると感じています。

これから私は、子どもたちが「この学校で学べてよかった」と心から思えるような、かけがえのない経験を積み重ねることができる学校をつくっていきたいと思います。そのために、教職大学院での学びを通して、自分の実践を問い直し、よりよい教育のあり方を探究し続けていきたいです。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/大野市有終西小学校

尾崎 繭妙（おさき まゆみ）

私が教職大学院で学びたいと思うようになったのは、「学校とは何だろう」という問いが、これまでで

上に自分の中で大きくなっていったからです。教頭職に就いて四年目の今年、私は地元である大野市へ

異動しました。昨年度の三月までは、閉校する福井市の羽生小学校で、新たにスタートする美山小学校の準備に懸命に向き合っていました。地域の方々、子どもたち、教職員の思いが交差する中で、学校の在り方について考える時間が自然と増えていきました。

近年、学校を取り巻く環境も、学校のあり方も大きく変わってきています。多様性の包摂、ウェルビーイング…。どれも大切な視点でありながら、言葉として先に広がり、現場の実感とすぐには結びつかない難しさも感じていました。そのような中で、「教頭として何ができるのだろう」という問いが新たに芽生えました。自分の考えを整理し、より確かな軸を持って学校づくりに向き合いたい——その思いが、教職大学院を志す大きなきっかけとなりました。

事前履修として参加した夏期集中講座では、これまでの教員人生を振り返る貴重な時間をいただきました。そこで気づいたのは、私はずっと「つながり」を大切にしてきたということでした。二十数年、音楽を学級経営の柱にしてきた背景には、「想・奏・創」という三つの言葉があります。**想**——相手の思いを受けとめること。自分の思いを表現すること。**奏**——互いの違いをそのままに、響き合う関係を育むこと。**創**——その響き合いから、新しい価値を生み出していくこと。

この三つは、私が自然と大切にしてきた姿勢であり、これからの学校づくりの軸でもあります。人と人だからこそ生まれるつながりがあり、そのつながりが子どもたちの学びを豊かにしていく。そんな瞬間を、いつの時代も私は味わってきたように思います。

この春、地元の大野市に戻り、新しい学校での生活が始まりました。地域との結びつきが強く、学校が地域の中で大切にされていることを日々感じています。

一方で、管理職としての仕事は想像以上に幅広く、三年間の経験があっても、なかなか仕事の流れがつかめず、自身の仕事のルーティンがつかれないまま二か月が過ぎていきました。「ところ変われば…」「郷に入っては郷に従え…」そんな言葉を自分に言い聞かせながら、半分パニックのような心持ちで過ごした日々でもありました。

けれど、その戸惑いの中で改めて感じたのは、どんな環境でも“人と人とのつながり”が学校を支えているということでした。教職員の皆さんがそれぞれの個性や専門性を発揮し、子どもたちの成長を願って日々取り組む姿に触れるたび、私はまた、この学校でもその力をつないでいく役割を果たしたいと思うようになりました。

今、私は、自分の実践を言葉にし、他の方々と共有できる形にしていきたいと考えています。また、教職大学院で、同じように学校づくりに向き合う仲間と出会い、語り合い、学び合う時間を持てることを楽しみ味わいたいと思っています。

私はこれからも、「学校とは」「教頭として何ができるだろう」という問いを胸に、学校づくりに向き合っていきたいです。想を受けとめ表現し、響き合わせ、共に創る。その営みを続けていく中で、また新しい問いが生まれ、立ち止まり、考え直すこともあるかもしれません。そして、これらの問いにはきっと正解はありません。だからこそ、問い続けることそのものが、私自身の在り方をつくり続け、教育に携わる者としての歩みを深めていくのだと感じています。

これまで出会えた先生方や子どもたち、そしてその方々を支えるご家族の皆さんのおかげで、私は教職の道を歩んでこられました。感謝しています。そしてまた学び続けていこうと思います。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/鯖江市北中山小学校

片岡 秀子（かたおか ひでこ）

はじめまして。福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学いたしました、片岡秀子と申します。現在は、鯖江市北中山小学校で、教頭として勤務しております。

私は今年度、教頭として5年目を迎えました。3年目の時、「私は、教頭として何か足りないものがあるのではないかな。あるとすれば、それは何か。」と悩んでいました。そんな時、知人が福井大学連合教職大学院を紹介してくれました。この教職大学院で、自分自身の悩みとじっくり向き合いたいと思いました。そして、「私らしい組織マネジメントとは何か。」を探究することにしたのです。

昨年度、事前履修として、夏期・冬期集中講座や2月のラウンドテーブルで、学校の組織づくりについて多くの先生方と語り合ったり、過去・現在の自分を見つめ直したりする経験ができました。「教頭としてどうあるべきか。」について立ち止まって考えることは、業務に追われていると、なかなかできないものです。

冬が近付くと、入学試験に向けての準備が始まりました。仕事と家庭の両立をしながらの勉強は、想像以上にハードでした。だからこそ、合格した時の喜びは大きかったです。入学の機会をいただけたことに、本当に感謝しています。そして「入学試験にチャレンジした自分、頑張ったね!」と、心の中で褒めました。

4月。いよいよ開講式を迎えました。気持ちが引き締まりました。そして4月・5月のカンファレンスでは、「今日はどんな方と語り合えるかな?」と楽しみにしながら、福井大学に通っておりました。

ここで、私の研究テーマについて紹介いたします。私は、昨年度の夏期集中講座から今まで、歴代の院生

が書かれた「長期実践研究報告」を何冊も読ませていただきました。特に、「校内研究会を通して学び合う教職員集団づくり」という内容に深く共感し、当初は、私もそのテーマで教頭として教職員に伴走したい、と考えていました。

ところが、5月に入ってもやりたいことが具体的に定まりませんでした。本校は、私が赴任した時から、教職員が学び合う雰囲気ができていたからです。力量があり、協力的。その上、チャレンジ精神旺盛な自慢の教職員集団です。昨年度は国語に焦点を当て、県の「深い学びを目指した授業づくり支援」に応募し、年間を通して国語の指導主事と共に研究会を行いました。さらに、今年度は、研究主任と若手教員が算数に焦点を当てたいと提案し、県への応募が通った際には、皆で歓喜するほどの熱量があるのです。ですから、「研究会をいかに開くか。」という課題は何か違う。「問題は私自身の動きだ。」そう気付いた瞬間、目の前が明るくなりました。

そこで、6月に入って、私は1日の自分の動きを記録してみました。書き出してみることで、業務に追われ余裕を失っていることに改めて気付きました。

私の目標は、教職員一人一人に寄り添う温かい声かけと、やる気につながるアドバイスができる教頭になることです。実現のために、どうすればよいのか。このことをテーマに、これから探究していきたいと考えています。

福井大学連合教職大学院の先生方、スタッフの皆様、これから共に学ばせていただく院生の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/大野市有終東小学校

齊藤 永敏（さいとう ながとし）

はじめまして。今年度1年間、院生としてお世話になります。どうぞよろしくお願いいたします。

週末は早朝ランニングを楽しんでいます。特にこの時期は、朝の空気がとても気持ちよく感じられます。日ごとに青さを増す田んぼを横目に自然のにおいに包まれながら走っていると、日々の忙しさから少し解放され、気持ちがリセットされます。それと同時に、仕事のことをじっくり振り返る時間にもなっています。「もっとこうすればよかった」「今度はこうしてみよう」と、様々な思いが湧き上がり、また頑張ろうという気持ちになります。

私が教職大学院で学びたいと考えるようになったのは、現任校で担ってきた役割が大きく関係しています。赴任当時はベテランの先生方が多く在籍し、先輩方の姿を見ながら職務にあたっていました。しかし、先輩方の異動や退職が進み、私自身の年齢が上がるにつれて、学校の中で担う役割も少しずつ変わってきました。また、毎年のように新採用教諭が赴任し、若手教諭が授業づくりや学級経営に悩む姿を見るとき、声をかけたり相談に乗ったりするだけでなく、学校全体として支え合える仕組みや文化が必要だと感じるようになりました。今は、持続可能な形での「学び高め合うコミュニティ」づくりが不可欠だと考えています。

また、令和6年度にNITS探究型中央研修「働き方改革探究研修」を受講したことも、大きな契機となりました。研修を通して、働き方改革とは、単に業務を減らすことではなく、学校の当たり前を見直し、教師自身がゆとりや創造性を取り戻しながら、子どもたちのよりよい学びにつなげていくことなのだと学びました。そこで、そこで、児童のよりよい学びにつながる働き方の在り方を探究したいと考え、校内で「はぴプロ」を立ち上げました。全教員で業務の見直しや

校務運営の効率化、授業改革、保護者対応など、様々な取組を進めてきました。特に、校時表の見直しは、本校が目指す児童の育成にもつながる大きな取組でした。時間の使い方を見直すことで、児童の主体性を引き出すしかけを生み出しやすくなり、同時に、教職員が放課後に教材研究や対話に向かう時間の確保にもつながっています。これら一連の取組を通して、働き方改革は誰かが決めたことを進めるものではなく、教職員が対話しながら、自分たちの学校に合った形をつくっていくものなのだと実感しました。

現任校勤務は8年目となりました。現在は、教務主任として学校全体を見渡し、教育目標の具現化に向けて日々奔走しています。本校で同僚とともに培ってきたコミュニティをさらに発展させ、教職文化として定着させるために、私は何をすべきなのか。その問いを探究するために、教職大学院で学んでいきたいと思っています。

教職大学院では、様々な立場の先生方との対話を通して、多くの刺激を受けています。難しさを感じたり、自分にはまだ足りないものが多いと痛感したりすることもあります。集中講義やカンファレンスでの語り合いを通して、自分の実践や学校の姿を捉え直す機会をいただいています。学んだことを現任校での実践につなげ、同僚と共有しながら、学校全体の学びに少しでも生かしていきたいです。

一人で走るランニングは、気持ちが楽になり、とても楽しい時間です。けれど、みんなで楽しく走ることも好きです。同じ方向を見つめながら走ることに、少し「青春」のような温かさがあります。今年度も、教職大学院で出会った皆様、そして現任校の同僚と手を取り合いながら、ともに走り続けていきたいと思っています。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/福井大学教育学部附属義務教育学校

坂居 澄美（さかい きよみ）

皆さんこんにちは。今年度より学校改革マネジメントコースに入学させていただいた坂居澄美と申します。採用以来、ずっと中学校で勤務させていただいてきました。今の附属義務教育学校には、6年前に赴任させていただきました。育児と仕事の両立に無我夢中で過ごした灯明時中学校時代、足羽中学校時代……。それでもなんとか我が子が大学生にまで成長し、やっと少しゆとりができると思った矢先の赴任でした。

赴任した当初、私は「探究する学校」という言葉に、どこか特別な教育実践や新しい指導法を思い描いていました。しかし、実際に目の前にいたのは、問いに目を輝かせながら向き合い、自分の考えを仲間と共有し、新たな問いを生み出していく子供たちの姿でした。そして、その子供たちを支えていたのは、一人一人の思いや可能性を信じ、時に悩み、時に喜びながら、子供たちと真剣に向き合う先生方でした。子供のために何ができるかを語り合い、挑戦を後押しし、共に学び続ける先生方の姿に、私は何度も心を動かされました。また、苦しい時には温かく励ましていただき、今の自分があると思っています。

そのような環境の中で過ごすうちに、私自身の教育観も少しずつ変化していったように思います。変わったのは「教育観」という言葉だけでは表しきれないかもしれません。むしろ、人と対峙すること、人の思いに耳を傾けること、そして共に成長していくことの楽しさを、実感できるようになりました。もともと私は、一人で過ごすことを好む人間でした。一人で考え、一人で答えを探し、自分の中で物事を整理することに安心感を覚えていました。だからこそ、誰かに相談したり、自分の内面を言葉にして伝えたりすることには、どこかためらいがありました。

しかし、この学校に赴いて、授業研究や子供と対峙の仕方に深く悩む経験を重ねる中で、自分一人の力だけでは前に進めないことがあることを知った私は、勇気を出して自分の思いを言葉にするようになりました。そしてその対話の中で、それまで閉ざされていた視界が、ふっと開けていくような感覚を味わったのです。

また、本校では、教科の枠を越えたグループで語り合ったり、教育の本質に関わるような大きな問いについて、立場や経験の違いを超えて対話を重ねていく場が常に設定されています。その中で、誰かの何気ない一言が、新たな視点を見つけ出す……。その視点が別の誰かの経験と結びつくことで、さらに新しい考え方やアイデアへと発展する……。そんな、一人では絶対に考えられないものが生み出されていく瞬間に何度も遭遇しました。

対話とは、「自分を広げること」そして、「仲間と共に、新しい価値を生み出していくことだ」と、6年目にしてやっと心から感じることができました。

先日、卒業生たちの何気ない会話を耳にする機会がありました。

「附属の授業は楽しかった。」「ただ聞いているだけの授業は、もうつまらない。」

附属に赴任以来、よく聞く言葉なのですが、今年もまたこの卒業生たちの言葉を聞いて、あることに気付かされました。子供たちは、私よりもずっと前から、対話によって何かが生まれていく喜びを体験していたのだと。時間がかかりましたが、ようやく私も、子供たちが見ていた景色に少しだけ追いつくことができたのかもしれません。

今年からは、教職大学院での学びも始まります。そこには、また新たな出会いと対話が待っていると思います。子供たちが教えてくれた「対話の価値」を胸

に、この学校で、さらに教職大学院で学び続けられることに感謝しながら、そしてこれから出会う方々と

の対話を楽しみにしながら、私自身もさらに、学び続ける一人でありたいと思います。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/大野市有終西小学校/

柴田 一也（しばた かずや）

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました、柴田一也と申します。専門は保健体育です。今年度で清水中学校勤務5年目となり、第3学年主任として、学年団で力を合わせながら生徒全員が第一志望の進路を実現できるよう支援していきたいと考えています。昨年度は事前履修生として福井大学で学びました。私が大学時代に通ったキャンパスは異なりますが、40歳を過ぎて再び大学のキャンパスに通うことになるとは思っていませんでした。私は教師を目指した時期が遅く、大学卒業後すぐに採用された先生方が10年経験者研修を受ける頃に新規採用となりました。10年間のキャリアの差を埋めるために、人の2倍、3倍の努力をしなければならないという思いで、小学校教員としてがむしゃらに働いてきました。

初任校は全学年単学級の小規模校で、教員数が少ない分、一人ひとりの校務分掌は多くありましたが、その分多くの経験を積むことができました。当時から「自分が関わった児童生徒を絶対によくする」という信念をもち、日々子どもたちと向き合ってきました。しかし勤務を重ねる中で、新規採用として赴任してきた後輩への指導を任されるようになり、自分の考えや経験を相手に伝える難しさを実感しました。

「自分の指導は本当に正しいのだろうか」と自問自答する機会が増え、より広い視野と知見を身に付けたいと考えるようになりました。そこで、初任校で7年間勤務した後、中学校勤務を希望し、現在の清水中学校に赴任しました。

初めての中学校勤務は、小学校とは大きく環境が異なり、戸惑うことばかりでした。特に苦労したのは授業準備です。清水中学校では保健体育科教員2名

で1～3年生全9クラスの授業を担当しており、赴任1年目から3学年分の教材研究が必要でした。そのような中、20年以上の中学校指導経験をもつ先輩教員から多くのことを学び、中学校体育への理解を深めることができました。また、小学校時代から関心をもっていた「どこまで子どもに権限を委ねれば学習成果が最大化するのか」という課題についても実践を重ねてきました。教師の役割や単元構成、カリキュラムデザインを工夫しながら、生徒の主体性や技能の習得、思考力・判断力・表現力の育成との関係を分析してきました。その過程で、生徒の姿を丁寧に見取る力や、振り返りから心情を読み取る力の重要性を改めて実感しました。

中学校勤務も5年目を迎え、昨年度は第2学年主任、今年度は第3学年主任を務めています。私が最も戸惑ったのは、中学校の学年主任は学級担任をもたないという点でした。これまでのように自ら直接指導するだけでなく、学級担任や副担任と連携しながらチームとして生徒を育てる視点が求められます。そのため、「自分が関わった児童生徒を絶対によくする」という思いは変わらず持ちながらも、教員同士が協働して生徒を育てる仕組みづくりに力を注ぎました。

しかし、私には清水中学校以外での中学校勤務経験がありません。そのため、自身の経験や周囲から得た情報だけで判断することに限界を感じるようになりました。学校教育目標や文部科学省の資料などを根拠として理解し、自分の考えを説明できるリーダーでありたいと考えるようになりました。

さらに、福井県では今年度の夏季中体連をもって休日の部活動が終了する予定です。学校教育の中で部活動が担ってきた役割が変化する中、今後の中学校教育も大きく変わっていくことが予想されます。そうした時代の変化を見据え、教育の最前線で求められる知識や考え方を学びたいという思いから、教職大学院への進学を決意しました。

教職大学院では、「論点整理」や「学力観の転換」に関する資料を読む機会があり、多くの学びを得ています。また、年齢や専門教科、役職の異なる先生方との対話を通して、自分の視野が広がっ

ていることを実感しています。学級や学年の運営だけでなく、学校組織全体を見通しながら教職員が協働できる仕組みづくりについても学びたいと考えています。教職大学院で得た知見を実践につなげ、学校現場の活力向上に貢献できるリーダーを目指したいと思います。私一人でできることには限りがありますが、大学院で学んだことを実践し、少しでも学校現場の活力につながるよう還元していきたいと考えています。

1年間、どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/坂井市立長畝小学校

柴山 博貴（しばやま ひろき）

はじめまして。今年度より、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました、坂井市立長畝小学校の柴山博貴です。現在は小学校教員として勤務しながら、校内では研究主任として、授業改善や校内研究の推進に関わっています。

これまで私は、学級担任として子どもたちと向き合う中で、子どもが安心して自分の考えを表し、仲間と関わりながら学びを深めていくことの大切さを感じてきました。一方で、授業をよりよいものにしていくためには、教師一人の努力だけでは限界があることも感じていました。

2年前、私は研究主任として学校の研究を任されることになりました。初めの頃は、研究主任として何をどのように進めていけばよいのか十分に分からず、前年度までの流れを引き継ぐ形で校内研究を進めていました。しかし、研究を進める中で、自分の中にはどこか違和感が残っていました。研究授業や研究会は行っているものの、それが日々の授業改善や学校全体の変化にどのようにつながっているのか、はっきりと見えにくかったからです。

そのような中で、全国小学校道德教育研究会中部地区の分科会発表を数年後に控えることとなり、学校としてチームを組んで研究に取り組む必要が生まれました。このことは、私にとって校内研究の在り方を改めて問い直す大きなきっかけとなりました。一人の先生が頑張って授業をつくり、その成果を発表するという形ではなく、学校全体として何を大切にし、どのように授業改善に取り組んでいくのかを考える必要があると感じたのです。日々の授業の中で見えた子どもの姿を、教師同士で語り合い、悩みを共有し、次の実践につなげていくことが、学校全体の学びを支えるのではないかと考えるようになりました。

現在、勤務校では「教師同士の対話と協働を基盤とした授業改善の推進」を研究の大きな柱としています。イベント型の授業研究ではなく、普段の授業を少しずつ豊かにしていくことを大切にしながら、道德の授業づくりを語り合う「道德 Cafe」や、立場を越えて気軽に実践を共有する「フラット Cafe」などの取組を進めています。こうした場を通して、授業について語ることへの心理的なハードルが少しずつ下がり、先生方が子どもの姿をもとに実践を見つめ直す姿が見られるようになってきました。

しかし同時に、研究主任としての自分自身には、まだ多くの課題があります。先生方の思いや実践をどのようにつなぎ、学校全体の学びとして広げていくのか。校内研究を一部の熱心な先生だけのものにせず、日常の授業改善として根付かせていくには何が必要なのか。授業改善と学力向上、道德教育、ICT活用、子ども同士の対話をどのように結び付けていくのか。日々の実践の中で、明確な答えが出ない問いに向き合い続けています。

教職大学院では、1年履修に向けて、昨年度から集中講義等に参加させていただきました。そこで、これまでの実践を一度立ち止まって省察し、同じグループの方々と対話することで、多くの学びを得ることができました。その学びは、自校の研究を進めていく

上での力強い指針となりました。今年度もさらに、自分自身の教育観や学校改革に対する考えを深めていきたいと考えています。特に、教師同士が安心して語り合い、互いの実践から学び合う学校文化をどのようにつくっていくのかについて探究していきたいです。そして、その学びを勤務校に持ち帰り、子どもも教師も主体的に学び続ける学校づくりにつなげていきたいと思っています。

これからの1年間、大学院の先生方、院生の皆様との対話を通して、多くのことを学ばせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/敦賀市立松陵中学校

辻 博光 (つじ ひろみつ)

みなさん初めまして、敦賀市立松陵中学校から参りました辻博光と申します。福井大学大学院教職開発研究科学校改革マネジメントコースの1年履修で勉強させていただいております。1年間どうぞよろしくお願いいたします。

私は大学院に進学したかった動機が2つあります。

1つ目が2024年4月に現任校に赴任したことです。私は新採用から20年以上敦賀市内8つの小学校（うち3つは小中併設校）で勤務をしてきました。自分も発表者として関わった福井県学校体育研究会実践発表が行われ、「これからも体育を中心として学級経営していこう」と考えていた矢先の異動でした。その時から、「専門的な社会科の授業ができるのか」「学級経営も体育中心で作ってきたので、どのような学級経営をしていけばいいのか」など、「これまで行ってきたことが無駄になってしまうのではないかな」という気持ちでいっぱいになりました。

始まってみると、予想を超えた違いがあり不安がさらに募りました。生徒の様子、学校行事の運営、そして休日の部活動。自分は一つ一つできないことが

多い中、自分より経験も年齢も若い先生方が、自信を持って授業や行事、部活動を行っていました。そして生徒たちの信頼を得ている姿を見ると、「何かが足りない」「中学校での経験不足を補う何を得なければいけない」という思いが増してきました。

2つ目がマネジメント研修で学べたことです。「中学校での経験不足を補う何を得なければいけない」という考えがあった本校勤務1年目の年度末「マネジメント研修」の案内が届きました。そして副主任という役割になったこともあり、「自らの中学校教員としてのスキルアップよりも自分のこれまでの経験や知識を伝え、主任の学年経営を助け、若い先生方がやりやすい環境を作ったほうがよいのではないかな」という考えに至りました。その時に教職大学院で学びませんかというアナウンスがあり、すぐ申し込みを行いました。

そして昨夏の集中講義。これまでの自分の教員生活を振り返り、文章にすることで「自分はこんな実践をしてきた」ことがわかりました。また「自分の経験を文章化したことで、実践のねらいが明確になり、そ

のことが学年経営の助けになる」ことが実感できました。そして研修を通じて多くの先生方との意見交流ができ、「同じような悩みを抱えている方も多くおられる」ことがわかりました。自身の経験を振り返り、他の先生方と意見を交換し、そこで得たものから自分が実践を行う。こんな素敵な経験ができるのならぜひ勉強したい！と思うようになりました。

私自身、人と交流して話を聞くことは好きなほうです（なので敦賀からですがなるべく対面で通います）。これからたくさんの方との出会いがあり、つながりを持ち、それが自分のスキルアップにつながっていくとなると、これから楽しみです。

現在は現任校3年目になり、1年生の学年主任をしております。4月のカンファレンスで「経験や10

名の学年スタッフとどのように意思疎通していけばいいか」という悩みを話したところ「雑談すればいいんじゃない」とアドバイスをもらいました。それから学年スタッフと時間を見つけて、気軽に話すようにしました。これによって担任の先生方も気軽に話してくれるようになり、意思疎通が少し改善されたように思います。この後夏期集中講座・ラウンドテーブルと続きますが、多くの方と交流し、新たな学びを得て、現任校に還元できるようにしていきたいと思います。

1年間よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース（1年履修）/福井市森田小学校

法山 雄二（のりやま ゆうじ）

私は授業も学校も大好きです。テレビや新聞を見て「おっ、これは授業で使えるな」と考えたり、だらだら見ていたYouTubeの1シーンを「半年後の体育大会の前に教室で見せよう」と保存したりします。最近は、一流の料理人たちが「合格」「不合格」と札をあげるあの番組が大好きです。大人たちが本気で仕事に挑み、嬉し涙や悔し涙を流すラストシーンは絶対に道德やキャリア教育に生かせるなと思いながら見ています。職員室で隣の席の教頭先生からは、しっかり休んでねと優しく声をかけていただきますが、人生の一部として仕事を楽しめていることに、自分は恵まれていると感じる毎日です。

教師になってもうすぐ20年です。カンファレンスや長期実践報告で過去を振り返ると、自分が気付いていなかった転機がいくつもあったことに気付きます。その中で、専門教科である体育の授業観の転機となったエピソードを紹介したいと思います。かっこよく、エピソード名を「一年遅れの埼玉県」と名付けておきます。

私が教員になってちょうど10年目。当時私が勤務していた小学校に、埼玉県から一年間の交流人事で“山下先生”が赴任してきました。年齢は私の一つ下。川口市の風を感じるオシャレでかっこいい先生でした。一年間という短い期間のお付き合いでしたが、授業のこと、学校のこと、埼玉県と福井県の教育の違いなど多くのことを語り合い、学校の外でもたくさん楽しい時間を共にしました。でも、一つだけ相容れないところがありました。

「多くの子たちが楽しめるように、リングに当たただけで1点あげませんか。」6年生のバスケットボールの授業の進め方について彼から相談がありました。体育は私の専門教科。そしてバスケットボールは（一応）専門競技です。「いいかい、山下君。ボールを持たないときの動きをしっかりと教え込んだら、だいたいの子はシュートが打てるし、決まるようになる。リバウンドについても教えたいし、俺はルールを変えるとバスケットボールじゃなくなると思うよ。」当時の私は、純粋にそれが指導力だと思っていましたし、自分にはそれができていると自負してい

ました。私と山下先生は、同じ体育館で、違うルールで授業をしました。

彼が埼玉県に戻り、互いに新しい年度が始まりました。私は県小教研体育科の発表に立候補しました。二年後から開始される新学習指導要領に向けて、もう一度自分の力量を伸ばすチャンスだと思ったからです。たくさんの書籍を読み、いくつかの講演会を聞きにきました。そして、当時の教科調査官だった高田彬成さんのインタビュー記事を見て、忘れられない言葉と出会いました。

「運動が苦手な子に、『あなたは体育の授業が上手だね』と言ってあげられる、そんな授業ができる先生が増えてほしいですね。」

それまでの私は、バスケットボールを上手にさせる、サッカーを上手にさせる、器械運動を上手にさせる。それが体育の授業だと考えていたので、この言葉は大きな衝撃でした。そして、「体育の授業が上手な子って何？」と考えれば考えるほど、今まで自信満々でやってきた体育の授業は違うのかもしれないと感じるようになりました。

運動が得意な子、苦手な子が一緒に運動をする体育だからこそ、学べるものがきっとあるはず。そう考え、県小教研では「共生」をテーマにした「3人ハンドボール」の授業を発表しました。授業で生まれた言葉、授業で見られた動き方や友達への態度などを、単

元を通して掲示していきました。ルールも正式なハンドボールから大きく変えました。得点をしたらゴールキーパーと交代。全員が点を取れたら総得点は二倍。そして子どもに「ストップ権」を与えて友達のナイスプレーがあったときには試合を止めて声かけをしてもよい。それまで教え込みが中心だった私にとって大きな変化でしたが、たくさんの「体育が上手な子」を見つけることができ、手応えを感じました。

私が大きく変わることができたのは、高田調査官の言葉と出会えたからだけではありません。そう、埼玉県の山下先生の言葉が一年遅れて高田調査官の言葉とぴったりと重なったからだと思います。

教職大学院の学びは、エピソード「一年遅れの埼玉県」と同じ体験の連続です。いろいろな先生との対話を通じて、数年前の出来事がふと浮かんできたり、時期も学校も別々の先生の言葉が急につながったりします。「こうでなきゃいかん」という自分の価値観が変わり、やはり元に戻り、さらに違うものになっていきます。私が勤務する森田小学校は全校児童が1100人を越える大規模です。先生方の働きがいと働きやすさを高められる教務主任になりたい。そんな目標をもち、学校改革マネジメントコースで学んでいきたいと考えています。私と関わってくださる皆さま、どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年(1年履修)/福井市清水西小学校

長谷川 容子 (はせがわ ようこ)

今年度、学校改革マネジメントコースに入学しました、福井市清水西小学校の長谷川容子と申します。1年間、どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコースでは、将来、学校組織マネジメントの中心的な担い手となることを目指している方、組織運営やその支援に取り組んでいる方、学校改革の組織過程に実践的に関心をもっておられる方などが、それぞれの目標をもって学んでおられます。これまでの語り合いを通して、どの方から

も、児童・生徒や教職員、保護者や地域の方々、もちろん、ご自身のしあわせの実現を願っていることが伝わってきました。私自身も、自分の実践を振り返り、次の展望を描くことに対して、やってみようという勇気やわくわく感が沸いてきました。

昨年度の事前履修から「書く」ことが生活の中で、時間的にも思考の面でも多くの位置や重みを占めるようになりました。実際に書いている時間だけでなく、実践の中で種を見つける時間や見つけた種を価

値付ける時間、次の実践を構想する時間も含まれます。「書く」ことを意識することで、それまではあまり気に留めなかったこと、気付いても日常の忙しさの中で流されて記録に残さなかったことがどれほど多くあったことか。「書く」ことは、自分の日々の実践を文字にし、内省する習慣を与えてくれました。そして、自分の進む方向への軸をつくり、共に学校を創っていく教職員にもよい影響となって広がっていることを実感しています。

昨年度、新任校長として勤務することとなった学校は、年度末の閉校に向かって動き出していました。学校経営のミッションは二つあり、一つは「通いたくなる学校をつくる」こと、もう一つは、その学校最後の校長として「児童・保護者・地域の方が納得した形で閉校を迎える」ことでした。

12月の冬期集中講座で実践記録を書き上げると、その半分が閉校と新設校開校に関する内容でした。書くことで、二つのミッションが同程度の重みとして自分の中にあったことに気づき、驚きをとまなげて内省がより深まりました。教職員や保護者、地域の方と共に、不安を背負い葛藤を乗り越え、地域の未来に対する切実な願いを深く理解するに至った過程は、そこに関係した方々とのつながりを編み込んだ物語

となりました。閉校というセレモニーは、校長としての責任の重さを引き受ける重要な学校経営の営みでした。閉校式の後に感じたさみしさの意味の理解や、次の学校で価値付けていくべき「こと、もの、人」に対する視野の広がりも、「書く」ことによって生み出されたのです。

こうして、「書く」ことで、私の中の一つの物語が終わり、その続きが次の展望として開かれました。教職大学院での新しい出会いに期待を抱いて、実践を記し、語り合い、新たな価値への気づきを楽しみながら深めていきたいと考えています。このことは、目の前の児童や目指す児童の姿を描きながら学校教育目標の実現を共に目指す教職員、保護者や地域の方々のしあわせにつながると信じています。

福井大学教職大学院に進むにあたっては悩むこともありましたが、背中を押してくださった方々に感謝するとともに、また、受け取った期待や思いに応えられるように学び続け、自分を成長させていくことをここに誓います。つたない点もあるかと思いますが、学びに向かう気持ちはまっすぐです。1年間、どうぞよろしくお願いいたします。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/大野市陽明中学校

羽生 祐美 (はにゅう ゆうみ)

本年4月から教職大学院に入学しました、羽生裕美と申します。

現在、大野市陽明中学校で教頭として5年目を迎えています。

日々の学校運営の中で、生徒の成長や、子どもたちと一生懸命に向き合う職員の姿に触れ、うれしさややりがいを感じています。その一方で、複雑になっていく教育の課題に、学校としてどう向き合えばいいのか、ずっと考え続けてきました。

毎日があっという間に過ぎていく中で、ときどき立ち止まって考える時間がほしい、という気持ちも強くなっていました。答えのない問いに、自分の経験だけで向き合うのではなく、しっかりした理論を踏まえながら考えてみたい。そう思ったことが、入学のきっかけです。外に出て学び直すことは、自分にとって大きな挑戦でもあります。それでも、今だからこそ学べることがあると感じています。

大学院で学ぼうと決めたのは、仕事を重ねるうちに、学校づくりとは結局のところ「人づくり」であり「組織づくり」なのだと感じたからです。これまで、

生徒の「主体性」を育むことを大切にしたい学校改革に取り組んできました。小さなことを地道に積み重ねるうちに、生徒が、自分で考え、語り合い、自身の学びを深めていく姿に変化していくことを目の当たりにしました。また、その生徒の姿に、教師としてのやりがいを感じ、教師が成長していく姿は、私の大きな励みになっています。うまくいかないことも多いですが、その都度みんなで考え直してきました。一つ一つは小さな積み重ねですが、続けるうちに少しずつ景色が変わっていくのを感じます。教える側の見方が変われば、生徒の学びの姿も変わる。生徒の学びの姿の変容が、教師を成長させる…。教師と生徒の関わりの好循環を持続させたい、そう実感したことが、組織づくりという新しいテーマへと私を向かわせました。

この改革を一度きりで終わらせず、学校の文化として根づかせるには、教師自身も、対話と「省察（振り返り）」を通して学び続けるチームであることが大切だと思います。最近では、若手や中堅の教師が学校を支える場面が増えてきました。仕事の幅が広く、一人で抱え込みやすい現場だからこそ、お互いに支え合い、学び合える関係づくりが欠かせません。若い教師たちが安心して挑戦でき、「この仕事は楽しい」と思える職場にしたい。困ったときにふと誰かに相談できる、そんな雰囲気のある学校が理想です。その思いも、年々大きくなっています。上から指示を出すのではなく、教師一人一人の良さを引き出し、みんなで学び合うことを後押しする。そんなリーダーのあり方を、じっくり学び直したいと考えています。

大学院では、「実践共同体」という考え方をもとにした組織づくりや、教師が元気に働けるようにする

マネジメントについて学びたいと考えています。教師が気軽に意見を出し合い、お互いに学びながら振り返る—そんな「省察」のサイクルを、どうすれば無理なく日々の仕事に取り入れられるか。忙しい毎日でも続けられる、教師が「やってみよう」と思えるかどうか、長く続くかの分かれ道だと感じています。教師の過度な負担にならないことを大事にしながら、そこで得た学びを、生徒の学びにどうつなげていくか。現場での手応えと、理論の言葉とを行き来しながら、急いで結論を出すよりも、現場で試して、確かめながら、少しずつ整理して考えていきたいと思っています。

「地道にコツコツ」という、これまで大切にしてきた気持ちを忘れずに、いろいろな立場の院生の皆さんや先生方と、たくさん語りたいです。実践と理論を何度も突き合わせるなかで、次のミドルリーダーの育成や、対話のある学校づくりに生かせるものを見つけれたら—そう考えるとわくわくします。同じ悩みを持つ仲間がいると分かるだけでも、心強いものです。学校づくりは、「人づくり」、「組織づくり」。この思いを大切に、現場と大学院での学びにまっすぐ向き合い、人が支え合える学校づくりに少しでも力になれるよう取り組んでいきます。わからないことばかりですが、気軽に声をかけてもらえるとうれしいです。一緒に学ぶ皆さんとの出会いを大事にしながら、焦らず、楽しみながら学んでいけたらと思います。学んだことは、自分の学校に持ち帰って、職員と分かち合っていきたいです。短い一年間ですが、どうぞよろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/福井県立南特別支援学校

水野 敏博（みずの としひろ）

先日、地元の中体連の地区大会に参加してきました。私は自分の出身中学校で男子のバスケットボー

ルを指導しているのですが、今年のチームは残念ながら県大会への出場はかないませんでした。

私が中学生を指導するようになって12年が経ちました。始めたきっかけは私が特別支援学校に異動になったことでした。当時の地元中学校男子バスケット部の保護者の方々が声をかけてくださり、指導を依頼されたのが始まりでした。顧問の先生のご理解を得て指導に加わったところ、顧問の先生が多忙で土日の活動になかなか参加できず、次第に部活動ができないうちが増えてしまいました。そこで私は中学校のバスケット部をそのままクラブチーム化して、学校の部活動とは切り離して活動し始めました。

それからは私がかつて高校で指導していたときと同様のペースで指導していました。毎週土曜も日曜も練習、あるいは練習試合を行い、泊りがけで県外遠征に行くことも珍しくありませんでした。むしろそのような指導によってチームが試合で勝てるようになり、子どもたちがたくましく成長していく姿に喜びを感じていました。県大会で優勝こそしませんでした、上位に食い込んだ年もありました。

しかしそのような時期は長くは続きませんでした。いつのまにか県大会に出場するのがやっとなという状態になりました。まずチームに入る子どもの数が減りました。少子化のせいもあったかもしれません。しかし同じ中学校ではほかの部活動の中には、比較的に子どもがたくさん加入する部活動はありました。つまり私が指導する男子バスケット部が子どもに選ばれない活動になっていたのです。活動のベクトルが勝つことに傾きすぎていて、当時の子どもたちの思いとは離れていたのかもしれない。私は正しいと思うことをやっているにもかかわらず、その思いが思うように子どもたちに伝わらないもどかしさを感じながら活動していました。プレーヤーである子どものニーズとコーチである私のニーズとが乖離したのだと、今は感じています。

転機となったのは、現在一緒に活動している顧問の先生が異動してきたことです。その先生は異動前までライバルチームの指導者でしたから、彼が非常に熱心で優れた指導者であることは知っていました。そして彼と相談して、ヘッドコーチを彼に任せ、私はアシスタントコーチとして指導に携わることにしま

した。私は教員でありながらも、中学生から見れば近所のおじさんなので、顧問の先生とは一線を画して子どもたちとかかわるように意識しました。中学生は精神的に幼い面がまだまだ目立ちます。ですから日中に教室などで見せる子どもたちの姿と、部活動の場で見せる姿とでは、随分と違うのです。おそらく子どもたちの好き嫌いが言動に直接的に表れやすいのでしょう。ですから体育館での姿しか知らない私は、子どもたちの内面を十分に理解できないまま指導に当たらざるを得ません。そんな私よりも教室での子どもたちの姿も知っている顧問の先生のほうが、子どもたちの内面を的確に理解した指導ができます。それによって子どもたちも理解されているという安心感の中で活動できます。

指導体制を変えたことの成果は間もなく現れました。部員が増え、バスケット未経験者もたくさん加わりました。さすがに顧問の先生も当初は戸惑っていましたが、粘り強く指導するうちに、子どもたちはぐんぐんと実力をつけ、試合に勝つことも増え始めました。勉強嫌いで教室では全く活躍できませんが、バスケットではとびきり輝く子どももいました。やがて、そこまで上手くも強くもないけれども、どの子どももバスケットが好きなことだけははっきりと伝わってくる、そんなチームになりました。

今年は県大会には進めませんでしたが、この1年もとても楽しく活動できました。失敗を乗り越え、確実に成長する子どもたちの姿を見るのがとにかく楽しいのです。子どもたちはバスケットの技能を高めると同時に、たくさんの経験を糧として自己理解を進めます。また仲間とともに活動しながら、お互いを理解し合います。お互いの違うところをちゃんと認め合うところは、本当に上手です。人間的に少しずつ成長していることがはっきりと見て取れます。練習していても、試合の場でも、私も含め指導者も子供たちも、自然と笑顔になります。

時代は部活動の「地域移行」へと動いていますが、部活動に熱心な教員と地域の指導者とが協働して指導することの利点が、今の私のチームには確実に現れていると感じます。私のチームの顧問の先生のほ

かにも、部活動を愛する先生方が大勢いらっしゃると思います。どうか子どもたちのために頑張ってください。

ください。身体と家庭を大切にしながら、共に頑張っていきましょう。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/坂井市立坂井中学校

山田 圭一（やまだ けいち）

今年度、私は教職大学院の一年履修生として学ぶことになりました。自分でも驚くほどの大きな決断でしたが、昨年度に受講した福井県のマネジメント研修が、その背中を押してくれました。二十一年間、教員として走り続けてきましたが、ふと立ち止まって振り返ると、「あれ、私って体系的に学んだこと、ほとんどないのでは…？」という事実が気付き、思わず苦笑いしてしまいました。生徒指導と部活動に全力投球してきた日々は確かに充実していましたが、気付けば“現場の経験だけでなんとかしてきた教員”になっていたのです。

そんな私が大学院で学びたいと思うようになった理由は二つあります。一つ目は、尊敬する先輩の存在です。その先輩は教職大学院で学び、学校改革に次々と挑戦していました。生徒主体の活動を広げたり、教員同士の協働を促したり、学校全体のビジョンを共有したりと、まるで学校の空気を少しずつ新鮮な風に変えていくような取り組みばかりでした。しかも、そのどれもが生徒の成長につながり、学校全体を前向きにしていけるのです。私はその姿を見て、「学校って、こんなにも変わるものなのだ」と心から驚きました。そして同時に、「自分もこのように学校を支えられる教員になりたい」と強く思いました。しかし、そこで気付くのです。「いや、そもそも学校をどうマネジメントすればいいのか、私は全然知らないぞ」と。経験だけでは見えない視点、理論に裏付けられた判断、組織を動かすための戦略…。それらを知らずに“学校を良くしたい”と言っても、どこか空回りしてしまうのではないかと。そんな不安が、大学院で学ぶ決意へとつながっていきました。

二つ目の理由は、「学び直し」への強い思いです。教員二十一年目ともなると、若手の頃のようにがむしゃらに突っ走るだけでは通用しない場面が増えてきます。これまでは、幸運にも素晴らしい先輩方や管理職の先生方に恵まれ、現場で多くの学びを得ることができました。しかし、これからは自分が若手を支える立場になっていきます。そんなとき、「自分が学び続けていないのに、どうやって若手に“学び続ける姿勢”を語れるのだろうか」と思うようになりました。そこで、「これはもう、学びの場に飛び込むしかない」と腹をくくったのです。正直に言えば、少し怖さもありましたが、それ以上に“今の自分を変えたい”という気持ちが勝ちました。

現在、私は生徒指導主事として勤務しています。生徒指導は、日々の小さなトラブルから大きな課題まで、まさに“学校の縮図”のような場面に向き合う仕事です。生徒の成長を支えるためには、教員同士の連携、組織としての一貫した方針、家庭や地域との協働が欠かせません。しかし現実には、教員一人ひとりの価値観や経験に左右され、組織としての統一感を持つことが難しい場面も多くあります。そんなとき、「もっと組織として動ける学校にしたい」と強く感じるようになりました。だからこそ、大学院で学校経営や組織マネジメントを体系的に学びたいのです。現場での経験を理論的に整理し、より効果的な支援の在り方を探究することで、生徒指導主事としての役割をさらに高めたいと考えています。

教職大学院での学びを通して、私は「生徒と教員の双方を支えられる教員」へと成長したいと思っています。生徒の成長を支えるためには、教員が安心して挑戦できる環境づくりが欠かせません。教員が学び

続ける文化をつくり、組織としての力を高めることが、結果として生徒の学びを豊かにします。私はその循環を学校に根付かせたいのです。

これからの一年間、私は学びの場に身を置く者として、謙虚に、そして少しだけユーモアを忘れずに、貪欲に学び続けたいと思います。現場での経験と大

学院での学びを行き来しながら、自分自身の教育観を深め、学校をより良くするための実践を積み重ねていきます。教職大学院での学びが、私自身の成長だけでなく、学校や生徒の未来につながるよう、精一杯取り組んでいく覚悟です。どうぞ、よろしくお願いします。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/福井大学教育学部附属特別支援学校

山本 陽一（やまもと よういち）

今年度から連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学した山本陽一と申します。現在は、福井大学教育学部附属特別支援学校に勤務し2年目になりますが、それまでは、鯖江市の中河小学校で7年間、惜陰小学校で6年間、合計13年間、特別支援学級の担任をしてきました。特別支援学級担任を務める中で、教育相談など、通常学級の児童や先生方を特別支援教育コーディネーターとして校内支援体制づくりサポートする機会をいただきました。その中で感じていることは、「特別支援教育＝教育」という考え方のもと、教育活動を進めていくことの大切さです。通常学級の中にいる気がかりな児童生徒が分かりやすい、ユニバーサルデザインな授業を創るお手伝いをしていくことで、通常学級の教育、特別支援教育という垣根をなくしていくことが大切だという認識や思いが先生方に広がっていくよう取り組んできました。また、前任校の惜陰小学校では6年間、福井県特別支援教育研究連盟の事務局として、県内外の先生方と協力しながら福井県の特別支援教育の下支えを行ってきました。令和6年には全国大会福井大会があり、それに向けての6年間は怒涛の日々ではありましたが、そのときに出会った先生方と目的に向かって協働した経験や人脈が、附属特別支援学校へ赴任した今でも大きな財産となっています。13年間の特別支援教育学級担任や特別支援教育コーディネーターとして、特別支援教育に携わってきた中で大切だと感じてきたことは、各校において人数が少ない特別支援教育の担当者にとって、分からないこ

とや困ったことがある時に相談できる人がいるかどうかということです。私は、管理職や同僚、他校の特別支援教育に関わる先生方、特別支援教育センターや特別支援学校の先生方など、多くの方に相談しながら助けられてきました。そこで、私は、3年前から鯖江市や越前町の特別支援教育に関わる先生方の横のつながりが広がるコミュニティができないかと全日本特別支援教育研究連盟から支援を受けて取り組んでいます。主に現在は、参加する先生方から要望があがったテーマについて講師を招いて一緒に学習する場を作っていくことで、横のつながりが広がっていくよう取り組んでいるところです。2年目の終わりの学習会では、鯖江市や越前町以外の福井県下の先生方にご参加していただくことができました。また、この取り組みが、日々の実践や担任業務について情報共有できる持続可能なシステムとなるよう工夫していくことも大切な意義だと考え取り組んでいます。

また、私が附属特別支援学校に勤務するようになって感じたことは、目的を同じとする仲間との協働の大切さとすばらしさです。

1年目は、高等部に所属し、初めての特別支援学校勤務ということで複数の担任で一つの学級を持つ際の協働、生徒の活動によって担当が連携する際についての協働の在り方を学ぶことができました。本校は、子どもの一人一人のウェルビーイングについて考える研究をしていますが、子どものウェルビーイングを実現していくためには、教師自身のウェルビ

ーイングな状態であることが大切であると感じています。2年目の今年度は、中学部の代表として中学部の先生方の協働を支える役割を担っています。先生方のウェルビーイングが高まるよう心理的な安全を保ち、気持ちよく協働ができる中学部を目指しています。

この教職大学院では、様々な形の協働の在り方や実現に向けてのプロセスを学んでいきたいと考えています。ここでの学びを、これからの教師生活に生かし、学校や教師コミュニティの発展に寄与していければと思います。

学校改革マネジメントコース1年（1年履修）/福井県教育庁嶺南教育事務所

山脇 仁美（やまわき ひとみ）

みなさん、こんにちは。学校改革マネジメントコースに入学しました、山脇仁美と申します。大学生の頃は家庭教師のアルバイトをし、採用後は特別支援学級担任として勤務しました。現在は、嶺南教育事務所の特別支援教育課に所属し、教育相談、就学指導、研修の企画運営などを担当しています。

家庭教師として個に寄り添った経験、教員として授業づくりや学級経営に試行錯誤した経験、行政として学校全体を俯瞰する経験—これらが自分の中で少しずつつながり始めていることを感じています。

ふり返ると、どの立場にあっても一貫して大切にしてきたことは、「どうすれば学びやすくなるか」「どうすれば活動が面白くなるか」と想像を膨らませることでした。そのためには、「なぜ意欲的に取り組めたのか」「どうして興味が向きにくかったのか」など、子どもたちの行動の背景を多角的に見つめることが欠かせませんでした。

特別支援学級担任として過ごした日々は、実態が同じに見えても子どもによって役立つ支援が異なること、また同じ子どもでもその日の様子によって必要な支援が異なることを痛感することの連続でした。子どもによって、その日の調子によって、築いてきた関係性によって、かかわり方を瞬間に判断する必要があり、「先輩の先生がうまくやっている方法を取り入れてもうまくいくとは限らない」ということを深く理解するようになりました。失敗も多くありましたが、子どもたちの好きや得意をよく観察して活動の出発点にすることで子どもたちの学びが広がるこ

と、子どもたちの表情の変化やつぶやきといった小さなサインを手がかりに支援方法を工夫することで子どもたちの「わかった」「できた」につながることに気づき、さらにはその瞬間に子どもたちの気持ちと自分の気持ちもつながったような感覚になれた経験が、私にとって実践の大きな喜びでした。

行政の立場になってからは、学校全体の動きや組織としての取組に目を向ける機会が増えました。学校とは、さまざまな立場・知識・経験・専門性・価値観をもつ人たちが「すべての子どもたちの幸せ」という共通の目標に向かって協働する場所であることを強く感じています。また、学校を訪問すると、先生方が瞬時に支援のコツやノウハウを取り入れて、子どもたちにかかわっている姿を目にします。学校には、たくさんの実践知が散りばめられていますが、その多くが個々の先生の中にとどまり、十分に共有されないままになってしまうことも少なくありません。私自身、学級担任であった頃は、日々の実践が充実していた一方で、その実践を周囲の先生方と分かち合うという発想には至っていませんでした。

昨年の夏期集中講座でこれまでの実践をふり返る中で、前任校の「一人一授業」の取組を思い出しました。当時の私は、授業者の支援のよさや工夫点を特別支援教育の視点から見つけて発表する役を担っていました。今ふり返ると「HOW」の共有にとどまり、「WHY」（なぜそのタイミングで声をかけたのか、どうしてその方法を選んだのか等）に踏み込めていなかったことが、非常にもったいなかったと感じて

います。夏期集中講座でじっくりふり返る機会があったからこそ、過去の経験への価値づけが変わり、次の学びへとつながっていることを実感しています。

この一年、学校に散りばめられている実践知を拾い集めて組織の力へとつなげていくことについて、みなさんとの対話や実践を通して丁寧に学びたいと

考えています。そして、学んだことを日々の業務を通して現場に還元し、先生方が互いに学び合い、すべての子どもたちにとってのよりよい環境を整えるきっかけづくりを担いたいと思っています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。



5 月カンファレンス



「あつい」季節の始まり

ミドルリーダー養成コース2年/札幌新陽高等学校 佐藤 淳哉

5月とは思えない「暑さ」だった。札幌市は20℃超えの初夏の陽気ともいえる天候で気持ちが良い。ようやく雪がなくなったことに違和感をもたなくなり、暖かい季節の訪れを感じることができる。しかし拠点のある奈良市に出発する前に確認した天気予報は、滞在期間中の奈良市の最高気温は31℃。札幌市でも珍しくなくなった真夏日とはいえ、5月に札幌市で経験するような気温ではなかった。

新千歳空港で同期と合流し、近況報告から始まる対面のカンファレンスが好きである。常に連絡を取り合うわけではなくとも、それぞれの場所で頑張っている仲間がいるとわかっているだけで、自分の背中が押されているように感じる。しかし直接会えることは、コロナ禍を経て、より重要な価値を示すようになった。同期と話しながら向かう奈良市の道中は、カンファレンスへの気持ちを「熱く」高めてくれる。子育てや多忙な日常業務で、普段は開こうとすると手の止まる「厚い」本を読むことができるのもカンファレンスに向かう道中の醍醐味である。頭の中の学びスイッチがONになった。

5月合同カンファレンスで印象深いのは「求められる学習と教育評価、変わる試験問題～求められる学習と授業改善の方向を探る」である。私は私立大学職員としての勤務経験を有していることから高等教育への関心も高い。大学入試で多様な入試形態が増加していることは間違いない。しかしこれは最近始まったことではない。2014年には追手門学院大学が育成型入試（総合型選抜）としてアサーティブ入試をスタートさせている。この取り組みは当時の高等教育

業界で話題となった。つまり2010年代に始まった入試改革の波が業界全体に広がってきたと捉える方が自然である。

他方で高等教育機関は研究と教育という二つの側面から、学力も欠けてはならない。昨夏、東北大学が2050年に向けてすべての入試を総合型選抜に切り替えていくと表明したことは記憶に新しい。総合型選抜といえば、グループディスカッションやプレゼンテーションなどの試験が一般的である。しかし、東北大学の総合型選抜は学力テストも含めて多面的に評価する仕組みを採用している。つまり学力が軽視されることはない。このような現状を踏まえ、高校教育はどのようにあるべきか。大学入試だけが高校教育に求められることではないが、高大接続は意識しなければならない。教育政策そのものが、学校種の接続をシームレス化している今日、高校教育、高大接続はどのようにあるべきか再考する必要があると感じた。当然のことであるが、高校教育を考えるときに、義務教育を切り離して語ることはできない。大学院での学びは、所属する学校種だけではなく、日本の教育政策を俯瞰的に理解することの重要性を再認識する機会となる。自分自身のあり様や、現状を捉え直す大学院での学びを実践に生かし、また学ぶ。この往還こそが福井の学びであると強く感じた。

学校現場に立つ一人として、いま現場が教育、発達、学びの変化の過渡期であることを日々感じる。その過渡期に何もしないことはもったいない。学びと実践を行き来し、日々の困難に四苦八苦しながら抗うことが教員としての楽しさではないだろうか。正解

がないことをモヤモヤしたまま受け止める、教員のネガティブ・ケイパビリティが問われているのではないだろうか。

カンファレンスの翌日、奈良の、関西の「暑さ」を警戒して用意していた半袖短パンで空港に向かって帰路についた。空港に向かう電車の中に半袖の人はいても短パンを履いている人はいなかった。ほんの

少しだけの恥ずかしい気持ちと、カンファレンスの「熱さ」による火照りとが入り混じった私には、ちょうど良い服装だった。まだ肌寒い札幌市に向けて、少しでも「厚い」新書を開いて私の学びの旅は続いている。

長期実践研究報告書の執筆に向けて、理論と実践の往還をする「あつい」季節が始まった。

他校の実践から自校の研究に生かす

ミドルリーダー養成コース2年/南越前町立南越前中学校 澤崎 直紀

「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望を開く」というテーマで美浜町立美浜中央小学校の平城慶彦先生より話題提供をしていただいた。1つ目の課題としてあげられたのは、子ども達の現状と支援体制のバランスに偏りがあり、子ども達の成長を遅らせてしまっているということであった。子ども達をサポートする体制が整っているが故に子ども達が教職員に頼り、自分達で学び合い、実践することから離れてしまっていた。2つ目の課題としてあげられたのは、教職員の価値観や考え方に違いがあり、改革が停滞してしまっているということであった。基礎学力の保障を重視するが故に教え込みの授業が増えてしまったり、下校時間が遅くなって教材研究をする時間を十分確保したりすることが難しくなっていた。それらの課題を解決するために、取り組まれたことが校内研究を核とした対話で創る教員の学び合う組織づくりである。教員同士で教育観を語り合うことを通して目指すべき教育の方向性を統一し、協働的な学びの組織へと転換することができた。また、子ども達は大人が学び合う姿を見ることで協働的に学ぶ意識が芽生え、子ども達が主体的に学ぶ環境を整えることができた。すると、教職員と子ども達で対話を軸にした学校づくりや授業づくりに発展していった。子ども達の考えを学校や授業に取り入れることで、子ども達自身が学校をつくっているという楽しさや責任に気づき、主体的に活動に取

り組んだり、学びに向かう意識に変容があったりした。

私の心が動いた実践は、チームで創る協働的な授業づくりであった。私が考えてもみなかった授業づくりへのアプローチの仕方だったからである。授業づくりは1人、または教科の教員で行い、できあがった指導案を数名の教員に見てもらって修正をし、実践する。実践後には、多くの教員から授業者に授業に対する質問や指摘などを行うという流れしかないと考えていた。しかし、平城先生の実践では、指導案を作り上げる段階の前に教員が資料を持ち寄ってどのような授業をしていくのかを考えていた。授業者の教科の教員だけではなく、多くの教員が最初の段階から関わることになる。授業者の負担感と心理的な壁をなくすだけがメリットではないように考えた。専門外の教員が関わることで多面的で多角的な視点で授業をつくることができるのではないかと考える。専門的な知識があれば、これくらいの内容であれば分かってくれているだろうと思っていても、他の教科の教員から子ども達は前段階の知識もないかもしれないなどと別の視点を与えてくれる。また、発問一つでも多くの人が関わることで、分かる人もいれば分からない人もいて全員に伝わる内容になっているのかを考えることもできる。授業後の研究会においても、授業者に対しての質問や指摘というよりも子

どもの姿や自分の教科でも生かすことができる手立てなどについて話し合い、共有することができるのではないかと考えた。授業づくりに対する新たな視点を与えていただき、私自身も勤務校で研究授業を実践する教員に研究主任として寄り添いながら、授業づくりができるとよいと考えるようになった。そして、私だけでなく多くの教員を巻き込んで進めていきたいと考えた。

私の実践としては、5月初めに校内にて全教員に参観してもらう公開授業を行った。事前に教員には見てもらいたい、考えてもらいたい点を研究通信を通じて伝え、子どもの姿から授業を見るということをしてもらった。子どもを見取ってもらい、今年度の研究のテーマに入っている「子どもが主語になる協

働的な学びの工夫」と「分かった実感できる授業の工夫」について、どのような工夫が学校生活の中でできそうかを考えた。研究会では授業内容の指摘だけではなく、本校が目指す生徒像に近づけさせるために何をしていくとよいかと子どもを主語にした話が多く見られた。また、今年度の研究について教員同士で共有する機会にもなり、今後の授業実践で生かしてもらえるきっかけになったと考える。また、教職大学院からも先生方に授業と研究会と参加していただいた。子どもの様子や本校の教員の話し合いへの参加の様子などを協働研究者として見ていただき、感想や助言等をいただいた。私自身も子どもが主語になる授業について深く考えるきっかけになり、今後の実践で子どもの反応をよく見取りながら工夫して授業していきたいと考えた。

「小さなベクトル」

学校改革マネジメントコース2年/文部科学省 林田 龍之介

5月の合同カンファレンスは、「学校での協働研究の現状をふまえて、これからの展望をひらく」をテーマに開催された。東明館中高での11年間の教員生活に一区切りをつけ、この春から行政の立場へと飛び込んだ私にとって、自身の現在地とこれからの使命を深く問い直す1日となった。

午前中の揖斐川中学校・馬淵校長の実践報告では、総合的な学習の時間を「探究」へとシフトさせる挑戦の軌跡が語られた。当初の現場の戸惑いや葛藤に対し、急激な変化を強いるのではなく、ラウンドテーブルを導入して対話を重ね、「今あるものを少しだけ変える」というスモールステップを踏むことで現場の空気が和らいでいったというプロセスは、私が前任校で経験した学校改革の道のりと重なり、深く共感した。

続くクロスセッションでは、私自身のこれまでの経験を共有させていただいた。組織改革において、反

発する相手に対しても、あえて隣に座るなどの「地味で小さなベクトル」を向け続けること。そして、「意図的なチーミング」によって対話せざるを得ない場をデザインすること。これらは、現場で泥臭く積み上げてきた私なりの「対話の裏技」である。同時に、国の通知に込められた意図と、現場の受け止めとの間にある「溝」を埋めたいという、私が行政へと歩みを進めた原点についても語らせていただいた。参加された先生方との対話を通して、私自身の実践が言語化され、新たな視点を得ることができたのは、このカンファレンスという温かいコミュニティの賜物である。午後の遠藤先生からの話題提供では、求められる学習と変わる試験問題の最前線について学んだ。知識の量ではなく、データに基づき考察する問題解決のプロセス自体が問われるようになっている。これは子どもたちだけでなく、教育を支える私たち自身が「どう学び、どう省察するか」という問いでもある。

現在、私はスポーツ庁にて、民間スポーツ担当という部署に所属し、日々「プロスポーツ」を軸とした人づくりやまちづくりに携わっている。行政の立場にいと、つい制度設計といったマクロな視点に偏りがちになる。

また、スポーツ組織のガバナンス等においても、行政がただ上から積極的に介入・指導すれば解決するというものではない。馬淵先生の実践やカンファレ

ンスでの対話が示すように、現場の「人」が納得し、自発的に動くための仕掛けやコミュニティづくりこそが、変革の本質的な鍵を握るのだ。現場と行政、ミクロとマクロ。その両者の間に立ち、双方の思いを繋ぐ架け橋となること。現場がやらされ感から抜け出し、本来の力を発揮して「自走」するための伴走者となるべく、この教職大学院という場でさらに省察を深めていきたい。

5月カンファレンスを終えて

学校改革マネジメントコース2年/美浜町立美浜中央小学校 平城 慶彦

5月の合同カンファレンスでは、自身の実践を報告する機会をいただいた。本校では、昨年度まで教員が協働する校内研究の仕組みづくりに力を入れてきた。その結果、一人で抱え込むのではなく、みんなでつくる授業づくりへと変化が見られるようになった。一方、日常の授業場面に目を向けると、先生方が熱心に授業を進めようとしているのに対し、子どもたちの学びに対する意欲や意識が高いとは感じられず、歯車が噛み合っていないように思えた。実際、休み時間や学校行事、たてわり活動などが楽しいと感じる子は多いが、授業が楽しいと感じている児童は、それほどでもない。子どもたちが意欲的に、自分事として学びに向かうためには、何が必要なのかを考えてみたときに、やはり子どもたちを学びの主人公にすることが必要だと感じた。

そこで、今年度は教員だけでなく子どもたちも一緒に他学級の授業を参観することから始めた。授業参観後のふり返りでは、自学級の現状を正確にふり返る発言や他学級の学び方を取り入れたいという意見など、子どもたちが学ぶことに対して真剣に考える姿が見られた。その後、担任と子どもたちが哲学的対話 p4c の手法を用いて、「みんなでつくる楽しい学びプラン」と題した学びの協働目標を設定し、授業実践とふり返りを繰り返してきた。低学年は、話の聞き方や集中の仕方など、学びに向かう態度面の目標

が中心になったが、高学年では学習形態や深い学びをつくるための方法などが中心となり、縦のつながりが見えてきた。

授業後のふり返りでは、教員と子どもたちが車座になり、コミュニティボールを回しながら本音で授業について語り合うことができた。これまでは見られなかった自分たちの学びを客観的に評価する発言や、よりよい学びをつくろうとする建設的なアイデアも出された。

私たち教員は、それらの発言に子どもたちの意欲や意識の高まりを感じるとともに、子どもたちが主役の授業づくりの具体像をイメージすることができた。その後の教員研修でも車座で語り合い、各学級の現状や1サイクルをやってみての感触を共有することができた。

今年度始めたばかりのこれまでにはない実践で当初不安もあったが、ここまで進めることができた要因は、子どもを中心に考えるということと、p4c 形式の対話を用いたということではないかと考えている。

校内研究の活性化や学校改革について考え、実践を進める中で、いわゆる多様な考え方が認められる社会の変容と実際の学校現場の実情にギャップを感じてきた。そして、このことが障壁となって学校運営

や校内研究が停滞することもあったのではないだろうか。

5月のカンファレンスで実践報告とディスカッションをさせていただき、改めて協働するための対話の大切さを実感している。そして、皆同じような問題意識や理想をもちながらも、それを実現できずにいたり、途中で立ち止まってしまっていたりする状態にあるのだと感じた。

これらの現状を打破し、学校改革を前に進めるためには、「真に子どもが主役の学校づくり」が必要なのではないだろうか。教員視点ではなく、子どもを視点に物事を考えることによって、教育観や指導観の違いを乗り越え、折り合いがついていくのではないかと思う。4月から子どもたちと教員が協働して授業をつくる、学校をつくる流れを止めず、課題を解決しながら、学校教育目標である「みんなでつくる楽しい学校」をめざしていきたい。

3回目の5月月間カンファレンスで見えてきたもの

授業研究・教職専門性開発コース3年/福井市中藤小学校 前川 真慶

5月のカンファレンスでは、「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」という大きなテーマの基、「求められている学習と授業改善の方向性を探る」ということを行った。

まず、今年度の自分の立場について簡単にまとめる。私は、教職大学院3年目になる。教職大学院1年目と2年目は、特別支援免許取得のために学部授業を基本としつつ、インターンでは、福井大学教育学部附属特別支援学校に行った。しかし、今年度は、福井市中藤小学校にインターンで行くことを決めた。3年目という最終学年で自分の環境を変えた理由は、将来的に勤める可能性が高い小学校の特別支援学級の現状を知りたかったという思い。そして、2年間附属特別支援学校に行かしていただく中で、特別支援教育とは何か、自分は教師としてどのように子どもとかかわっていくべきなのかということを知り、その成果を小学校現場でどこまで生かして、実践できるのかという自らの知識・実践力を試したいという思いもあった。これらの理由から、私は最終学年としてインターン校を変え、中藤小学校に行くことを決めた。

このような環境の変化が起きた中で、迎えたのが5月の月間カンファレンスであった。3年間5月の

月間カンファレンスに出ていると、毎年多少の違いはあるが似ているテーマをしている。しかし、毎度毎度、私の学びはたくさん生まれ深まっている。例えば、1年目であれば、話題提供者に目が行き、現場の先生が考える「子どもの学びと教師の学びが相似形」という考えや取り組みについて興味関心をもって、私は話し合いに参加しつつ、そこに現れる他業種の考え方の違いを楽しんでいた。2年目であれば、話題提供者の話から、教師同士の協働や信頼関係の構築といった側面を考えた。さらに、木村先生のVUCAの話の踏まえて、現代の教育のニーズである共通テストを見ていく中で、大卒での教育ニーズについても考えた。3年目は、午前中は、子どもや保護者、教師といった様々な方との「対話」の重要性について考えたり、午後は「求められている学習と授業改善の方向性を探る」ということで、全国学力状況調査の具体的な問題を見ていく中で国語と算数(数学)の問題の変化ということに注目して話し合ったりした。ここでの学びをいくつか紹介する。

午前中の「対話」の重要性については、現場で実施している取り組みについて話し合う中で、その重要性を再度認識した。例えば、私は、子どもとの対話であった。これは、子どもの心を支える関わりをする目標の基、今の私だからこそできる、子どもの思いを丁

寧に聞き、思いにこたえるということである。他にも、先生方同士の対話として、チームティーチングを話されている先生もいた。これは、子どもを色々な大人で見る中で、一人の教師だけでなく、多くの教師で一人の子どもを見ることで、自然と生まれる教師同士の対話であった。これ以外にも専門職と現職教員との対話、保護者と教師の対話など対話の対象は様々であるが、「対話」が生み出す雰囲気と学びは、教師という職を支える重要なものだ実感した。

午後の全国学力状況調査については、現代の学びのニーズの変化を感じると共に、昔ながらの学びの面白さの両立についても考えた。全国学力状況調査の算数・国語を見る中で、2教科共、大量の情報の取捨選択つまり情報処理能力が求められていることが分かった。これは、Aiの発達による影響であることは明確であった。このように、求められている学習といった面では、わかりやすい内容であったと思うが、それと同時に国語における魅力も減ったと感じた。

国語において昔は色々な話を読むことで読解力を求められていた。この物語を読むという経験は、国語という教科の一つの魅力であり、将来につながる趣味にもなると感じている。現代では、物語を読むことが少なくなっており、長時間集中して読むことが減っていると思う。そのように考えると、国語の魅力の減少に対して、残念に思うと共に、現代の学びのニーズを踏まえながら、昔ながらの学びの良さも取り入れるために、自分には何ができるのか教師として考え続けていきたい。

このように、3回目の5月月間カンファレンス参加であったが、学びがある面白い時間になったと思う。ここで学んだことを、今後、実践で生かしていくことは、理論と実践の往還を行う大学院生として必須なことである。その上で、より学びの視野を広げ、教師を目指すものとして歩みを止めないで進んでいきたいと月間カンファレンスを通して考えた。



週間カンファレンス・インターンシップ



木曜カンファレンス

授業研究・教職開発コース2年/岐阜聖徳学園大学附属小学校 稲葉 大晟

毎週行われている週間カンファレンス。福井では金曜日に行われるため金曜カンファレンス、通称金カンと呼ばれている。しかし、岐阜拠点では木曜日に週間カンファレンスが行われるため木曜カンファレンス、通称木カンと呼ばれている。週間カンファレンスでは、1の時間、2の時間、3の時間と、内容ごとに時間を分けて進められている。岐阜拠点も、同じように進めている。岐阜拠点の2の時間は、それぞれが担当の先生とマンツーマンでその週の省察をしていく。実践やインターンの相談をしたり、計画を立てたりするだけでなく、全体の間ではなかなか言いづらいことも、1対1だと言えたりする。3の時間では、本をみんなで読む。現場に出てからだと、なかなかじっくり本を読み、それについて議論し、深めていくという時間は取れないと思う。時には今の自分の生活と照らし合わせながら読み進めることで新しい発見にも繋がるいい機会もなっている。しかし、今回私が伝えたいこの2つの時間ではない。1の時間についてである。そもそも1の時間は何をしているのか。それはその週のインターンの省察である。これは福井も岐阜も共通。しかし、同じなはずなのに違う。2の時間と3の時間は、そもそも福井と岐阜で行われている内容が違うと思われるが(今年度は福井の金カンに参加できていないので、あくまで推測)、1の時間は、やることは同じなのに、やり方・進め方が違う。岐阜では、「週間レポート」というのを全員が木曜カンファレンスまでに用意して、週間カンファレンスに挑む。1人1人が順番に週間レポートをもとにしてその週のインターンの省察をしていく。この「週間レポート」をどう活かしていくのが、価値あるものに繋がっていくのだと思う。では、それはどういう

ことか。報告書はフォーマットはあれど、書いてくる内容に指定はない。自分の授業実践のことを書く人もいれば、生徒指導について書く人、先生方の授業を観て勉強になったことについて書く人など様々である。しかし、全てに共通していることがある。それは「深めるチャンスを見逃さない」ということである。例えば、自分が行った授業実践のことについて書くとする。「〇〇という指導を行ったが、失敗だった」という1文を振り返りの意味を込めて書いたとする。何も考えなければ、ただの振り返りで終わってしまうが、「〇〇という指導を行ったのはなぜか」「児童の実態は?」「何がどう失敗だったのか」「そもそもこの指導は合っていたのか」「この学年の発達段階を考えるとどうか」「そもそもこの授業の鍵となる部分は何か」と、深めようと思えばいくらでも深めるポイントが溢れてくる1文なのである。このように、自分の報告書の文章を見つめ直すことは、普段の自身の実践を見つめなおし、省察することにも繋がると思っている。初めは、この「週間レポート」を書くことに対して不満を持っていた。それは、様々なデメリットがあったからである。カンファレンスで話す際に、このレポートばかりに目が行き、話し手のことを全然大切にできていなかったり、もっとフランクに自由に話し合えるはずなのに、週間レポートがあることでどこか形式ばった、かしこまった雰囲気になってしまい、発言しにくい雰囲気になってしまったりなど他にも何点かあった。何より、書くことが負担であった。正直言って、これらのデメリットが解消されたわけではない。書くことが負担になっていることに変わりはないし、もっと別の方法があるのではないかと今も考えている。しかし、夏の集中講座や冬

の集中講座で、自分の過去の実践についてまとめる際にこの週間レポートをみると、当時の自分の気持ちを知れたり、今の自分の考え方と比較することができたりと、「当時を、その温度感で残しておくことができるもの」であると思う。今年度は、長期実践報告書の執筆もあるが、きっとこの週間レポートが活

躍してくれるであろうと思っている。長期実践報告書を書くその時に自分がどんな見方・考え方をもち、どんな視点で児童や先生方を見て、どんな実践を重ねているのかはまだ分からないが、今のこの自分を大切にし、書きとめておきたいと思う。

インターシップでの学び

授業研究・教職開発コース2年/福井市安居中学校 多田 和生

私は現在、福井市安居中学校において M1、M2 とインターンシップを行わせていただいている。安居中学校は、これまで自分が関わってきた学校とは異なり教科ごとに教室を移動する教科センター方式を採用しておりまた生徒数が少ないという特徴があったのだが、この安居中学校のインターンを通して私は「教師という存在」について問い直すことが出来たのである。

私は、正直これまで「教師」という職業には限界があると感じていた、それは、教員も人間でありその教員の評価軸でしかどうしてもものごとが捉えられないがためにいくら「誰一人取り残さない」ということを掲げたところで見落としてしまう生徒は必ず出てしまうという点である。しかし、インターンを通して感じたのは、自分はこれまで「自分という一人の教員と生徒」ということだけに囚われていたが「チーム学校」という言葉があるように「複数の教師と一人の生徒」ということが「誰一人取り残さない」ためには、必要なのではないかとということである。安居中学校では、教科会が存在しない。それは、教師が各教科に一人ずつしかおらず教科会が出来ないからである。しかし、研究会は毎月必ずありその時に話すのが「各教科における生徒一人一人の姿」についてであった。いつも話の話題は「A 君は理科の時辛そうだったけどなんかあった？」とか「B 君は休み時間話しかけたけど最近元気ない？」など教科に対しての学びではなく普段の生徒が自分にどう映っていくかという話で

研究会をいつも行っているのである。このことは、今まで「教師には限界がある」と思っていた私の中ではとても新鮮な経験であった。教師一人一人には、限界がある。その考えは変わらない。しかしながら、教師が研究会などで自分自身が見取った生徒の姿をありのままに話、自分がそこでどう思ったかを共有することで教員一人一人の見取りの幅を拡張していく。それでも、生徒を見取れない場面はあるかもしれないが、それでも教師が「チーム学校」として生徒一人一人と向き合うことにより「誰一人取り残さない学校づくり」に近づけることが出来るのではないかと考えることが出来たのである。

また、インターンを通してとても強く感じたことは、私はそれまで生徒一人一人が自己有用感を感じ主体的に活動していくには「教師が生徒の価値に気づき、認め、自己有用感を高める」ということが大切だと思っていたが、インターシップにおいて生徒同士が「互いの良いところ探し」や授業における「反省の共有」の姿を見取っていく中で、教員は「生徒を認める」ということを行う以上に「生徒同士で互いを尊重し、認めあう環境を作る」ということが大切なのではないかと思った。学校において、生徒と教師の関わりというものは学校生活の中に限られ、しかも学校生活の中でも常に一緒にいられるという訳ではない。しかしながら、生徒同士の関わりというのは学校の内外を問わず、教師と生徒との関係性に比べより近いものとなる。すると、生徒同士の関係性は教師と生

徒の関係よりもあらゆる場面においてその生徒の人物像が見えてくるのである。また、「チーム学校」として取り組むのは何も教師同士だけではない。生徒も含めての「チーム学校」なのである。生徒の視点も借り、互いを尊重し高めあえる環境を作ることによって生徒自身の自己有用感をより高めることが出来ていくのである。そのため、教師は、ただ教師が生徒を認めるということだけではなくその環境を作ることというところが教師に求められることなのではないかと私はインターンシップを通して学ぶことが出来たのである。

教師という存在には答えはない。自分の思う道が生徒にとって薬になるかもしれないし、毒にもなるかもしれない。だからこそ、多くの人々と協力しながら話し合ってから自分が生徒にとって良いと思えるものを探していく必要があるのだと思う。あと1年を切ったインターンであるがより多くを学べるよう精進したい。

「共に」を問い続ける日々

授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

松本 陵亮

インターンシップ2年目も、絶賛満喫中である。今年度は7年生所属ということで、昨年度共に過ごした9年生とは異なり、「中学校生活“最後”の〇〇」ではなく「中学校生活“最初”の〇〇」と一緒に経験させてもらっている。7年生と9年生との違いに慣れないこともあるのだが、この違いの大きさを感じられるのも中学校ならではの魅力だと感じる。なお、今年度はインターン生でありながらも、非常勤講師、そして7年生の副担任という立場にある。そのため、授業や生徒との関わりなどに毎日頭を悩ませてばかりなのだが、壁に直面し、この壁をどう乗り越えていこうかと考えていく日々が楽しい。

6月になり、インターン講師として始まった新たな生活にも段々と慣れてきたように思う。しかし、4月当初は、自ら望んだこのインターン講師としての生活が窮屈に感じられることも多かった。というのも、自分の授業の準備や学年会などによって、先生方の授業を見る時間や日々の記録を書く時間が減ってしまい、やりたいことを思うようにできなくなってしまったように感じたのである。また、上手いかわない授業へのもどかしさに悩み、副担任として何かしな

ければという思いにも駆られた。昨年度は本当に自由に過ごさせてもらっていたこともあり、すべきことが増えたように感じられるという違いは私にとって非常に大きいものだった。しかし現在では、見て学び省察する時間が当たり前に確保されている教職大学院で学ぶ2年間で非常に贅沢な時間であることを再確認し、その贅沢さを最大限に生かした非常に有意義な時間を過ごすことができている。

共に学びを創る。昨年度から意識していることなのだが、当然ながらそう簡単に到達できる境地ではない。今も悩み続けている最中ではあるのだが、最近特に、「共に」という部分について考えている。子どもだけが頑張っている、私だけが頑張っている、「共に」ではないのだろう。しかし、私の授業は、子どもへの丸投げか、私からの管理が強いのか、この両極端になりがちという現実がある。どうしたものかと頭を悩ませながら、授業外でも共に学びを創るという状態に少しでも近づこうとする日々だ。また、「共に」の相手は、子どもだけではないのかもしれないとも感じている。今年度は職員室で過ごすようになり、先生方と語り合いながら、共に子どもやお互い

の学びを創っているような感覚もある。そして、大学院では院生と共に。

週間カンファレンス（金カン）は、まさに院生と共に学びを創る場なのだろうと思う。M2 となった今年度はグループでのファシリテーターを務めることが多いため、出来事や事実の報告会では終わらせまい、共に学びを創るのだという意識をもって試行錯誤しているところだ。しかし、「共に」というのがやはり難しい。授業と同じで、私だけが頑張っている、相手だけが頑張っているでも成立しないのである。私自

身、自分のことばかりに目が向きがちだという自覚があるため、これからも「共に」を意識し、考え続けていこうと思う。

教職大学院や附属で学んでいると感覚が麻痺してくるのだが、日々の実践について語り合い、振り返りを省察へ、省察をさらに省察する場や時間があること、共に学ぶ仲間がいることは、当たり前のことではない。この贅沢な環境で学べるだけのことを学んでいき、子どもだけでなく、同僚の教師とも共に学びを創ることのできる教師となっていきたい。。

足元に目を凝らせば

授業研究・教職専門性開発コース 3 年/福井県立丸岡高等学校 山崎 真純

半袖の服を着る度に、まだ先にあると思っていた夏がすぐそこまで迫っていることを思い知らされる。ついこの間まで上着が無いと肌寒い気がしたのだが、今ではすっかり半袖を着ている。時間とはなんてあっという間に過ぎていくのだろう。

私は焦っている。なぜなら、今の私には何も新たに生み出せず、ただ時間だけが過ぎていく感覚があるからだ。これまで積んできた知識や経験という貯金を切り崩しているだけで、新しく積み上げている気がしない。目まぐるしく動いていた昨年度までと比べると、立ち止まっていることにもどかしさを感じる。

今年の 3 月頃に、3 年目をどのように過ごそうかを考えていた。3 年目は時間に余裕ができるだろうから、これまでできなかったことをしていこう。金曜カンファレンスはきっと去年のことを思い浮かべながらになってしまうだろうから、去年の金曜カンファレンスにどんな意味があったのかを問い直そう。そう決めて始まった 3 年目は意外にも忙しく、気付けば机に向かい勉強をしている時間が多くなっている。金曜カンファレンスはもっと俯瞰する立場になると想像していたが、しっかりテーマにのめり込んでい

る。でも行動はしているのに、それに伴った知が蓄積している実感がない。

インターンシップ先では、実践してみたいと思っていた生物基礎の授業をさせていただいた。生徒たちが実際の生き物と触れ合い観察できる時間を作ろうと考えた。しかし学校に飼育している生き物はおらず、生き物がいそうな池や川などもない。生き物があまりいない場所だという印象を持った。大学の池からメダカを連れてくることにした。それでもダンゴムシは生徒たちの身近な場所にいるかもしれないと思い、比較的植物や石の多い校舎裏を散策してみることにした。

小雨の降る日も校舎裏に行ってみた。雨が降っていると人の気配はない。湿った草や土の匂いが濃くなり、晴れている日とは違った雰囲気になる。足元に気を付けながら歩いていると、私の膝辺りを勢いよく横切る者がいた。小さなアマガエルだった。思いがけない出会いに感心して眺めていると、アマガエルの向こうにある側溝で動く者が見えた。近づいてみると大きなナメクジだった。すぐ隣の石段には小さなナメクジもいた。のんびりと動く彼らをしばらく観察していた。他にも何かいるかもしれないと思い

植え込みの近くへ行ってみると、5 cm程の四角い穴のあいた石が目に入った。普段は底に落ち葉が敷き詰まっているだけだが、この日は雨水も溜まっている。覗いてみると、1 mmほどの小さな粒が無数に泳ぎ回っているのが見えた。ミジンコのような。ミジンコはどこにでもいるようで案外いない。こんなタイミングで出会えるとは思わず、今すぐにでも誰かに教えてあげたくなるほど嬉しくなった。

探し始めてみると、この場所にはたくさんの生き物がいた。当初持っていた「あまり生き物がいない場所」というイメージは間違っていたようだ。足元に視線を向け、注意深く目を凝らせば、そこに待っていたのは生き物たちとの遭遇だ。彼らはいなかったの

はなく、私が見つめようとしていなかっただけだった。

大学院は、待っていれば誰かが新しい知を授けてくれる場所ではない。自分で取りに行く、もしくは生み出していく場所だろう。何もしてこなかったわけではないが、行なってきたことを振り返って、その意味を考える時間は少なくなっていた。私は何も得られていないのではなく、得たものに気付かず、見ようともしていなかったのではないだろうか。

立ち止まって、自らの足元を見てみよう。そしてここまで付けてきた足跡に目を凝らそう。誰かに話したくなるような発見があるかもしれない。

大学の学びとインターンシップでの学び

授業研究・教職専門性開発コース2年/高志高等学校

渡辺 悠日

大学院では、授業実践を理論と往還しながら振り返る姿勢の重要性を学んだ。特に、主体的・対話的で深い学びや、プロセスを重視した評価、インクルーシブ教育の考え方について理解を深め、生徒一人一人の学びを丁寧に見取ることの意義を実感した。また、多様な文献講読や研究発表を通して、教育実践を根拠に基づいて考察する力や、他者との対話を通して実践を改善していく姿勢を養うことができた。インターンシップでは、高校現場で授業参観や授業実践に携わり、大学院で学んだ理論を実際の教育現場で確かめる機会となった。生徒の反応や表情、発言を丁寧に観察すると、同じ授業でも理解の仕方やつまづき方は一人一人異なることを改めて実感した。そのため、知識を一方的に教えるだけではなく、生徒の考えを引き出し、対話を通して理解を深める授業づくりの必要性を学んだ。また、先生方から授業改善の助

言をいただき、自分自身の授業を客観的に振り返る習慣が身に付いた。

特に印象に残っているのは、生徒との信頼関係が学習意欲に大きく影響するということである。日常的な声掛けや小さな変化への気付き、生徒の良さを認める関わりを継続することで、授業への参加態度が前向きに変化する場면을数多く経験した。理科では実験や観察を通して『なぜだろう』という疑問を大切にし、生徒が主体的に考える学びを支える教師でありたいと考えるようになった。今後は、大学院で培った研究的視点と、インターンシップで得た実践的な学びを結び付けながら、生徒一人一人の学びを丁寧に支援できる理科教員を目指したい。また、授業改善を継続し、『誰一人取り残さない教育』の実現に貢献できるよう、学び続ける教師として専門性の向上に努めていきたい。



コースだより



Reflections on a Year

Middle Leader Courses, Year 2/ Fukui Prefectural Sabae High School **Ethan Lowe**

It has officially been one year since I joined the program, and I can confidently say that nothing in this program has been as I expected it would be. My expectations and preconceptions about graduate school being a solitary affair, with lots of studying and reading, have firmly been shattered in that one year. I was able to talk to many international teachers, gaining valuable perspectives not only on how classes are in their home country, but also, I heard them describe the classes they visit from a unique perspective. At the roundtables I was able to talk to many Japanese teachers from around the country and being able to synthesize the Japanese and international perspectives of education has made me a more well-rounded teacher. I think teaching, despite being a social job where you can interact and cooperate with many different teachers at your school, can easily turn into an isolated job. It is easy to shut out your coworkers and just focus on doing your own thing. One of the most valuable things I learned in my first year was the value of cooperating with other teachers, and especially how valuable it can be to organize multi-disciplinary classes. I know now that to be an effective teacher, I should constantly be looking to expand my practice by talking to other teachers about their classes, getting feedback on my classes, and working with teachers that aren't necessarily in my department.

One of the ways this semester I was able to get feedback and hear other perspectives was by organizing a

classroom visit with the Fukui University international students to a 3rd year English class. In that class, I organized the students into groups and assigned an international student to each group. The students introduced their hometown of Sabae, and then the international students introduced their home country. It was a lively cultural exchange that I think really helped the students gain a wider perspective of the world. Afterwards, I heard the international students' feedback about how curious some of the students were, what kind of questions the students asked, and that the international students really enjoyed the class. What interested me was how different the students were from their usual selves, how they changed into much more curious and English-interested students. Hearing that feedback and seeing the students' reactions made me reconsider how I have been designing my classes, and I hope I can create that level of interest in my regular classes.

Looking forward to next year, my goals are to incorporate more multi-discipline areas into my classes, as I think that will help create more interest in English classes. I am also looking forward to the summer roundtable, as I am hoping I can talk to many different teachers from across the country. Also, I want to create better relationships with my fellow teachers, as I feel I have been a bit lazy regarding building good relationships, which I know is a key part of being a teacher.

From Observer to Change Maker: My Transformative Journey in the Middle Leader Course

Middle Leader Courses, Year 2/Fukui University Faculty of Education Affiliated Compulsory Education School

Kelvin Chiumia

"Education is not about knowing more, it is about becoming better." This is perhaps the greatest lesson I will carry from the Middle Leader Course.

When I arrived in Japan as an international student from Malawi, I believed I understood what effective teaching looked like. However, the Middle Leader Course challenged my assumptions, broadened my perspectives and transformed my philosophy as an educator. Today, I can confidently say that the Kelvin you see now is an upgraded version of the person who began this journey several months ago.

What made this programme truly exceptional was its culture of continuous learning and collaboration. Every interaction became an opportunity to grow. I learned not only from my professors and supervisors at the University of Fukui but also from my mentor at Fuzoku Junior High School, experienced teachers from Fuzoku JHS and other schools across Japan, fellow international students and Japanese educators who generously shared their knowledge and experiences. The programme demonstrated that leadership is not about having all the answers but is about learning from others, reflecting together and growing collectively.

Each month introduced new opportunities for professional development through conferences, round-table discussions, lesson observations, school visits and intensive summer and winter course programmes. Visiting schools such as Wakasa High School, Takefu High School, Maruoka Minami Junior High School, Sabae High School, Katsuyama High School, Koshi High School and Hokuriku High School allowed me to observe diverse teaching

practices and effective school management in action. Every visit expanded my understanding of what quality education can achieve.

One of the greatest transformations in my thinking was discovering that effective education is student-centred, inquiry-based, collaborative and deeply connected to real-life experiences.

Science lessons particularly challenged my previous understanding of teaching. Rather than relying primarily on textbooks and teacher explanations, students actively investigated concepts through experiments and real-life observations. I vividly remember observing a lesson on the parts of a flower. Instead of studying diagrams in a textbook, students examined real flowers, identified each part independently and constructed their understanding through investigation. In Malawi, where limited resources often mean relying on textbook illustrations, this approach demonstrated how authentic learning experiences can significantly deepen students' conceptual understanding.

Mathematics lessons also reshaped my teaching philosophy. Instead of teachers demonstrating one correct procedure, students explored multiple solution strategies, explained their thinking, compared ideas with classmates and reflected on different approaches. Learning became a process of discovery rather than memorisation. I realised that when students are trusted to think independently, they become more confident, creative and resilient problem-solvers.

English lessons at Fuzoku Junior High School revealed how enjoyable learning can be when students

actively participate. Every lesson followed a thoughtful structure that included student-led warm-up activities, conversation practice, an essential question, individual thinking time, pair discussions and lesson reflection. Learning English became an engaging experience where students built confidence naturally through communication rather than simply memorising grammar rules.

Technology education was equally inspiring. Grade 8 students were designing and constructing Bluetooth speakers by identifying electronic components, assembling circuit boards, soldering connections, testing their work and diagnosing faults through electrical measurements such as resistance (Ohms). Watching students transform theoretical knowledge into functioning products highlighted the importance of practical, hands-on learning. It reminded me that education becomes most meaningful when students create, experiment and solve authentic problems.

Another impressive aspect of Japanese education was the strong partnership between schools and families. Parents were regularly invited to observe classroom learning and witness their children's progress firsthand. Such openness strengthens trust, accountability and community involvement, an approach that remains uncommon in many Malawian schools.

Beyond classroom instruction, I observed how collaboration forms the foundation of school improvement. Teachers worked together through interdisciplinary meetings, lesson study and collaborative lesson planning. Students also learned collaboratively through inter-grade discussions and Social Creation Projects that nurtured leadership, responsibility and civic engagement. These experiences reinforced my belief that learning thrives in communities where everyone contributes.

Some of the most valuable lessons occurred outside formal lessons. Sharing lunch with students, cleaning classrooms together and participating in club activities provided unique opportunities to understand

students' behaviour, values and personalities. These shared responsibilities demonstrated that education extends far beyond academic achievement. It is equally about developing character, respect, responsibility and a sense of belonging.

One memorable highlight was the Blooming Music Festival, where students from Grades 5 to 9 showcased what they had learned in music classes. Parents attended the performances, celebrating students' achievements alongside teachers. The festival illustrated how sharing learning experiences can deepen understanding, broaden perspectives and build confidence. Students demonstrated not only musical performance but also their understanding of concepts such as the relationship between sound and music.

Another unforgettable experience was observing Tankyu (Inquiry) Projects, where students presented innovative solutions to real-world challenges. One project explored the use of drones for marine rescue operations. Students applied concepts from physics including motion, gravity and air resistance, to design practical solutions capable of saving lives. Witnessing high school students connect scientific theory with meaningful community problems was truly inspiring. Such authentic inquiry projects remain rare in many Malawian secondary schools, making this experience particularly eye-opening.

Equally inspiring was observing the remarkable culture of punctuality, organisation and shared responsibility within Japanese schools. Every activity was carefully planned, every minute valued and every member of the school community understood their role. These practices demonstrated that effective school management depends not only on good leadership but also on a collective commitment to excellence.

As I reflect on this extraordinary journey, I realise that the Middle Leader Course has transformed not only how I teach but also how I think about leadership and educational change. It has strengthened my belief that meaningful learning happens when students are

empowered to inquire, collaborate, create and apply knowledge to real-life situations. It has also reminded me that great educators never stop learning.

As I prepare to return to Malawi, I carry with me more than memories. I carry new ideas, renewed confidence, valuable friendships and a deeper commitment to transforming teaching and learning in my own country. My aspiration is not simply to replicate what I observed in Japan, but to adapt these practices thoughtfully to the Malawian context so that more students can experience engaging, meaningful and future-oriented education.

The Middle Leader Course has been far more than a professional development programme. It has been a journey of transformation. It has reshaped my philosophy, strengthened my leadership and inspired me to become an educator who continuously learns, reflects, collaborates and leads positive change.

Indeed, the Kelvin returning home is not the same Kelvin who first arrived in Japan. He returns not only as a teacher but as a lifelong learner, an educational leader and an advocate for meaningful educational transformation.

事実と解釈

学校改革マネジメントコース 2 年/メットライフ生命 石賀 匡

こんにちは、春の陽気な日差しがあつという間に過ぎ去り、蝉も鳴くのをためらうような暑さがやってきそうですね。今年はスーパーエルニーニョの影響もあるかと思いますが、猛暑もありますね。冷夏とはどこにいったのか。暑い夏のカンファレンスを一緒に乗り切りましょう。

初めましての方もいらっしゃるので簡単に自己紹介をさせてください。私、メットライフ生命（生命保険会社）に所属しており、学校や教育関係とは遠い場所で働いておりますが、たまたまのご縁と自分が気になる事は、してみたいと言う性分で大学院通わせて頂いております。メットライフ生命で 17 年民間企業で 25 年働いており、企業から見た、また子供を持つ親として、営業の立場からと先生とは違った立場や視点からお話が出来ますので一緒になった場合には、どうぞ宜しくお願いします。

この出会い、この思考も諸行無常でありその移ろいを楽しみ、今年がはや 2 年目。今まで取り組んでこられた方の実践記録を読ませて頂くたびに発見や気づきと共に本当に自分もかけるのかな？今してい

る事は、どうなんだろう？など恐れに捕まる事もありますが、自分の行動の振り返りと自分の思考について、今までで 1 番向き合っているのではないかと思います。振り返れば、カンファレンスで素晴らしい出会いと気づきを得て、中森先生にもたくさん気づかせて頂き、新しい思考や行動が出来ていると感じております。カンファレンスがあるため、思考だけでなく行動に移さないと健康的な強制力が働くのも期限のある良さだなと思います。

今回は、その中で毎回僕の前に立ちはだかる壁が【事実と解釈】今年は、【平等と公平】が自分にとって気になるテーマでありましたが、木村先生とカンファレンスで一緒にさせて頂いた際に、そもそもそのようなもの自体がない事もありますか？と言って頂き、この言葉がずっと頭から離れずに残っていました。そして気づいたことは、、、確かにないかもここについて少し書かせてください。

そもそも比較を作っているのは、誰なのか？

それぞれをジャッジしているのは誰？

それは僕という 1 人の思考（今まで体験したり学んだ事）の考えであり、その考えから比較を生み出して平等と公平を作り出しているかもと気づかせていただきました。

仕事の分野でお客様とお話するときもお金についての不安をおっしゃる方がいらっしゃいますが、同じお金に対しても、お金の量がある事とお金を楽しめずに不安になることは別、またお金を稼ぐこととお金が残ることも別です。

—————

子供に時間を取ることに

子供と繋がることは別

—————

同じ人物でも

無力でいることと

自立することは違う人生

自立することと

自立しながら余裕を持つことも違う

僕自身は、「質」を確認出来るようになりました。

また質が見えずにいらっしゃる方もいます。

自分自身の生まれ育った環境や体験そして世間的な流れ・風習などもあると思いますが、自分では同じ思考に陥りやすい。自分と考えの違う方や専門家の方のお話を聞いて視野が広がり気づきが広がると今感じております。

また世界 81 億人の中のたった 1 人の考えに過ぎず、何者でも無い自分。とようやく気づく事が出来まし、そして人は、それぞれ違う生き物であると言う事も。まだまだ自分の考えに縛られたり、判断の基準にしてしまう事がありますが、ありのままをみて、相手に確認していくコミュニケーションと相手が話しやすいセーフティな場作りを仕事でも学校でも意識して過ごしていきたいと強く感じています。目の前の人をジャッジせずに自分の色眼鏡をかけて見る事はなくその人をもっともっと知っていけたら、そしてその人の可能性を本人が気づき、新しいエネルギーで次へ向かってもらえたらと僕自身が何か出来るものでもなく、諸法無我であると思いますが、縁のある人に何か意味があると思い、その時、その時を大切にしていきたいと思います。

つたない文章にお付き合い頂き、またお読み頂きありがとうございます。

まだまだカンファレンスと一緒に気づき、学んでいけたらと願っております。ありがとうございました。

やっぱり話したい

学校改革マネジメントコース2年/岐阜市立陽南中学校 大前 剛士

連合教職大学院 2 年目を迎え、校内でも教務主任 2 年目を迎えました。昨年度始めの目まぐるしい業務に比べれば今年こそはと、淡い期待をしていましたが、その考えは甘く、やはり同じぐらい忙しく、時間もかかってしまっていました。自分の力のなさを痛感した瞬間でした。

また昨年度末に、管理職や生徒指導主事が異動となり、校内で四役と呼ばれるメンバーでは私だけが

残留となりました。漠然とした不安が漂う中で、ありがたかったのは、岐阜聖徳学園大学の先生方が学校訪問に来ていただけたことです。年度が始まって間もない頃に、学校長との懇談をしていただき、連合教職大学院のシステムのことを直接伝えていただいたり、昨年度の様子をお話しいただいたりしたおかげで、何より私自身が安心して今年度の研究実践に取り掛かることができました。

ここでは、そんな中でスタートさせた今年度始めの全校研究会での実践について紹介することで、コースだよりとさせていただきます。

私たちが月間カンファレンスやラウンドテーブルで対話をし、充実感を味わう瞬間をぜひ校内の職員にもという考えと、研究2年目を迎えるにあたって共通理解を図りたいという考えから、今年度1回目の全校研究会は授業公開を実施せず、対話中心の研究会を位置付けました。昨年度中に提案をして研修主事と準備を進めていましたが、その導入部分だけどのように進めようか思案中でした。そんな中で迎えた福井での4月のカンファレンス。福井大学の栃川先生が話された資料を読む前の導入を聞いた時に、ぜひこの話題を本校の職員にもと思いました。栃川先生に参加していただくことは叶いませんでしたが、資料を提供していただき、職員に提示しながら話をさせていただきました。2日間行われる4月の月間カンファレンスほど時間を確保することはできませんでしたが、じっくりと論点整理を読む時間を取れたことや対話の時間を十分確保できたことは大きな成果となりました。

先生方の振り返りにも

- ・資料の内容は難しかったです、読む時間を作っていただけてありがたかったです。全ては読み切れなかったのも、また時間のある時に読みたいと思うのと同時に、多分読んでも理解できないことが多いので、またいろいろな先生と話したいと思いました。
- ・自分の中で理解してから話すのにはまだまだ時間がかかってしまいそうでしたが、そんな状態でも先生方とお話しさせていただくことで、すっきりしていくことや、同じ疑問をもってみえると気付くことがあったので話せてよかったと思いました。

・個別の知識の獲得ができればよいのではなく、中核的な概念の理解が重要視されていることがわかり、普段の授業でも、毎時間の知識の獲得よりも、その知識を使って考えを書く授業をしているので、方向として間違っていなかったと分かった。

これらの先生方の振り返りを研修主事と読んでいく中で、この方法は間違っていなかった、先生方はやっぱり話したい、語り合いたいと思ってみえることがよくわかりました。そしてこの日以降、職員室での先生方の会話量は今まで以上に増えたように感じました。

先日、自主研という形で授業を公開させていただいた際にも、授業中であるにも関わらず少しの時間でも授業を見に来てくれた先生方、貴重な空き時間を使って、一時間じっくりと授業を見てくださった先生方の姿が全職員の半数にものぼりました。さらに、授業を見に来てくれた先生方に話を聞きに行くと、感想や意見だけでなく、「僕からも聞いてもいいですか?」「私の教科の話聞いてもらってもいいですか?」などと、ちょっとした時間のつもりがついつい長く話してしまいました。

働き方改革で勤務時間外の業務を削減していくことが大切なことは十分理解しているつもりではいます。ただし、職員同士のこういった関わりや営みの中にも、「働きやすさ」「働きがい」を感じられるのではないかと改めて感じました。同時に、そういった時間を求めている先生方が多いことにも気付かされました。私はそういった先生方が参加したいと思える研修や憩いの場を、可能な限り企画していきたいと思います。

連合教職大学院の先生方に支えてもらいながら、連合教職大学院の先生方から刺激をもらいながら。

福井大学教職大学院で2年目の学びを迎えて

学校改革マネジメントコース2年/埼玉県立上尾高等学校定時制課程 前橋 俊輔

1 福井大学教職大学院での学び2年目を迎え

福井大学教職大学院での学びに支えていただいていることに感謝している。カンファレンス等で、福井大学教職大学院の先生方、在籍する院生の方々、ラウンドテーブルに参加する方々からの教えや意見交換等をとおして一歩前に進む力をいただいている。立ち止まってしまう自分の視野を広げてくれる。以下に、自分自身が今、2年目を迎えて考えていることを、まとまりなくも書きとめます。

2 言葉の意味を問い直すこと

「実践」について考えると、管理職（教頭）として何をするのが実践と言えるのか、長期実践研究報告を書くに向けて、「何を書けばいいのか」「何が書けるのか」と、まだまだ見通しが立たないでいる。そのような中で、「言葉の意味を問い直すこと」が必要だと感じはじめています。

学力の三要素「知識・理解」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」、「リーダーシップ」「協働」「対話」「心理的安全性」「働き方改革」「やりがい」等の捉え方、「学ぶ」ということ、そのような言葉の意味合いの理解を深めることが自分自身の足場を固めていくために必要だと感じるとともに、継続的に向き合っていきたい。

3 理論と実践の往還について

「理論と実践の往還」という在り方が、ぼんやりとだけ見えてきたように思う。「見えてきたように思う」と言いつつ、的外れであったら、今後、見直していければと考えている。

「言葉の意味を問い直すこと」で言及した「対話」や「協働」をとおして、教育活動が変容してく。その中で、管理職（教頭）である私がどのように関わるこ

とができるか、できているのかを、「理論」として学んだ内容に照らし合わせる。

たとえば、「リーダーシップ」と言われたときに、自分自身が行っている実際の教育活動への携わり方が、どのような「リーダーシップ」と言えるのか。または、「リーダーシップ」と言えるものではないのか。その点を振り返る中で、福井大学教職大学院での学びや著作物から学ぶこと等と照らし合わせると、自分自身の取組が、少し相対化されて見えてくるような感覚がある。

繰り返していく中で、まだまだぼんやりしているが、組織における「リーダーシップ」の在り方と自分自身の在り方の照らし合わせから、少しだけ教育活動への関わり方が変わっていく。とても小さな変化かもしれないが、これが、「理論と実践の往還」と言われている点なのかと感じはじめています。実際には私が変化することはできていないかもしれないが、少なくとも大切にすべき点を考えさせてくれている。そのように感じています。

4 所属する教職員の関係性、教育活動の変容

上記のような循環の中で、所属校に目を移すと、一昨年から所属する教職員の方々がイメージしている教育活動が、昨年度の実践を踏まえ、今年度、さらに改善を進める中で変化をしていると感じている。一重に、所属している教職員の方々の力だ。教育活動が充実してきている。

教育活動の計画段階で、それぞれに思い、考え、意見交換をする。実際に教育活動を展開して、生徒のあり様から、実践している教育活動に手応えを感じ、また検討事項を見出し、その先を考える。そういった教育活動が行われている。

5 生徒の姿

実践していく教育活動の中で、生徒一人一人にも変化が見えてきていると感じている。この NEWS LETTER では感覚的に捉えている表現にとどまるが、主体的に教育活動に取り組んでいる生徒の姿があるように感じている。

6 2年間の学びと実践をまとめるにあたり

私自身が、どのように役に立てているのか、貢献できているのか、まだまだ明確に述べることはできな

いが、少なくとも所属する教職員の方々の力が、教育活動を充実させ、生徒がその中で、生き生きとした姿を見せている。

残りの1年間、自分自身が貢献できる、役に立てる在り方を模索し続けていきたい。皆様に感謝をするとともに、これからも日々の教育活動を重ねていきたい。



特集：奈良ラウンドテーブル



7月4日、5日には福井ラウンドテーブルが開かれました。福井だけでなく全国各地でもラウンドテーブルが開催されその輪を広げてきています。

教師はどこで問い続けることができるのか

—協働探究ラウンドテーブルという試み—

福井大学連合教職大学院 鮫島 京一

教師の仕事は、人と関わる仕事です。生徒と関わり、同僚と関わり、保護者と関わる。だからこそ、うまくいく日もあれば、思うようにならない日もあります。近年、学校現場では多忙化や人間関係の難しさが指摘されています。「協働が大切だ」と言われる一方で、その実現に確信を持てないまま日々を過ごしている教師も少なくありません。私自身も25年、奈良女子大学附属中等教育学校（附属中等）で教師として仕事をする中で、同じような感覚を抱いてきました。

学校は大切な場所です。しかし時に、その学校文化そのものへの信頼が揺らぐこともあります。そんなとき、教師はどこで問い続けることができるのでしょうか。どこで自分の実践を語り直し、もう一度仕事の意味を見つめ直すことができるのでしょうか。その問いの中から生まれてきたのが、「協働探究ラウンドテーブル（協働探究 RT）」です⁽¹⁾。

協働探究 RT は最初から今の形だったわけではありません。その前身は、2013年から2018年まで、附属中等で開催してきた「奈良ラウンドテーブル（奈良 RT）」にあります。当時私は研究部主任として公開研究会を担当しており、その刷新を模索していました。その際に大きな刺激を受けたのが、2012年に参加した「福井ラウンドテーブル（福井 RT）」でした。そこで学び取ったことは「優れた実践を示す」のではなく、「実践を語ることでそのものが専門性を育てる」と

いう発見でした。大きな転回でした。ラウンドテーブルを奈良でも開催したい、となったのです。

しかし、奈良には奈良ならではの、土壌がありました。附属中等には公開研究会という先輩たちがつくった文化がありました。福井 RT を受容できる場があったのです。その文化に支えられていた私には、「総合的な学習の時間」の授業研究を通して、地域を越えた教師のつながりができていました。振り返ってみれば、2013年から2014年の実践は、福井 RT を奈良で開催するようなものでした。いわば、相撲でいう「地方巡業」に近かったのかもしれません。2015年からは、若手教師のラウンドテーブルを開催したり、札幌ラウンドテーブルの開催に協力してきました。このような実践の積み重ねが、「奈良らしいラウンドテーブルとは何だろうか」という新たな問いを生み出しました。協働探究 RT は、その問いへの応答として構想され、今日まで育まれてきた実践です。

名称を決める際のことは、今でもよく覚えています。2018年の夏のことです。札幌の仲間たちをはじめ、それまで奈良 RT に関わってきた仲間が集まり、奈良の「ラウンドテーブル」の前にどのような言葉を置くのかを話し合いました。さまざまな案が出されました。最終的には私が決めることになったのですが、その過程そのものが協働探究 RT らしかったように思います。その時はまだ、この名前がどのような歩みにつながるのか分かっていませんでした。しかし、

「協働」と「探究」という二つの言葉は、その後の歩みを象徴する名前になったように感じています。

2019 年以降、教師だけでなく高校生、幼児教育、企業など、多様な立場の人たちとの出会いが重なりました。しかし、協働探究 RT の理念である「あなたの課題は私たちの課題である」「あなたの生徒は私たちの生徒である」「あなたの持ち味が私たちを強くしなやかにする」という三つの理念だけは一貫して変わっていません。この三つを土台にして、それぞれの地域でさまざまなラウンドテーブルが展開されるようになっています。独自にラウンドテーブルを開く人もいれば、授業や校内研修に取り入れる人もいます。諸般の事情でそこまで至らなくとも、自らの実践を磨き上げる場として活用している人もいます。離れていく人もいれば、新しく加わる人もいます。協働探究 RT は、同じ実践を広げる試みではありません。それぞれの場所で、それぞれの実践が育まれていくことを信じてきました。だからこそ、一つの形を目指すのではなく、それぞれの試みを大切にしてきたのだと思います。

気づけば、奈良は中心ではなくなっていました。もちろん、今でも奈良は大切な拠点です。しかし、もはや唯一の中心ではありません。それぞれの地域や職場で、そして個人で、さまざまなかたちで、自らの問いを抱えながら歩み続けています。

福井 RT から奈良 RT へ。奈良 RT から協働探究 RT へ。さまざまな RT へ。福井 RT に触発され、その影響を受けながら、独自の歩みを続けてきています。福井 RT が大文字の RT とするならば、私たちは小文字の rt だと言えるのかもしれません。このようにして今年で 13 年目を迎えています。

ここで述べてきたのは、私から見た協働探究 RT の歩みです。協働探究 RT は、一人の人間がつくってきた実践ではありません。地域や学校種、キャリア段階を越えて、多くの教師や高校生が関わり、それぞれの立場から場を支えてきました。そのため、協働探究 RT には一つの「正しい歴史」があるわけではありません。札幌から見た協働探究 RT もあれば、静岡から見た協働探究 RT もあります。幼児教育から見た協働探究 RT

もあれば、高校生から見た協働探究 RT もあります。離れていった人から見た協働探究 RT もあります。私自身、この文章を書きながら、多様な物語の一つを語っているに過ぎないのだと感じています⁽²⁾。

そのことを象徴する出来事があります。NITS の元理事長である荒瀬克己先生が、『月刊高校教育』（学事出版）で協働探究 RT の試みを取り上げてくださることになりました⁽³⁾。2020 年のことです。その際、荒瀬先生から「この RT を開催している組織名を教えてください」と尋ねられました。ところが、私たちにはそれがありません。返答に窮しました。「私が構想したのはそうなのですが、私だけでやっていることではありませんし、組織というものもありません」とお答えしました。すると荒瀬先生は、「では、どう書けばいいのでしょうか」とおっしゃってくださいました。しばらくやりとりした末に、「私と仲間たち」という表現に落ち着きました。いささか不恰好な表現ではありますが、この他に言葉は浮かびませんでした。

私たちは組織をつくることを考えていませんでした。おそらく、集まる場をつくってきたのでした。それぞれが異なる地域や学校で実践を続けながら、ときどき出会い、ともに問いを囲み、またそれぞれの場所へ戻っていく。そのような試みを語る際に、時折、「実践コミュニティ」という言葉を使ってきました。しかし、私にはどこかしっくりこない感覚がずっとありました。

福井大学の連合教職大学院や福井 RT は「内外に開かれた実践コミュニティ」という言葉を使っています。私は以前から、この「内外に開かれた」という言葉がどこか気になっていました。しかし、その意味を十分に理解していたわけではありません。協働探究 RT の試みを重ねるなかで、その重みが少しずつ見えてきました。いま振り返れば、この言葉に込められた教師教育の思想や理念そのものに、私は導かれてきたのではないかと感じています。

一方で、「実践コミュニティ」という言葉には、どこか収まりきらない感覚も抱いていました。「内外に開かれた」という言葉の重みを受け止めるようにな

ったからこそ、その感覚はむしろ強くなっていったように思います。協働探究 RT の試みを重ねながら、この二つの言葉の間を行き来してきました。

その後、ようやく見えてきたのが「アライアンス」という言葉でした。ここ 3 年くらいでしょうか、私は協働探究 RT を支えている関係をそのように呼んでいます。中心をつくらず、それぞれの自律性を大切にしながら結びつく関係です。アライアンスは、最初から目指していた姿ではありません。「私と仲間たち」という関係を続けてきた結果として、後から見えてきた言葉です。今のところはこの言葉がしっくりきています。

協働探究 RT は、教師と高校生が、ともに問いの前に立つ対話の場です。2021 年からは日本航空株式会社に協力いただきながら開催しています。特徴は、21 世紀を生きる人間に求められる力を探究課題とし、参加者が対話を通じて理解を深めていくところにあります。

すぐに答えを出そうとはしません。誰かがまとめるわけでもありません。正解を教える人もいません。むしろ、「まだわからない」という状態を大切にします。私はこれを「引き算の関わり」と呼んでいます。そうした場の中で、「言葉よりも先に、関係があることに気づいた」「問いが残ることに価値があると感じた」「自分の学校を違う角度から見ることができた」「自分の仕事を見つめ直すことができた」などという声が生まれてきました。

協働探究 RT は、優れた実践を広げるための場ではない。教師が教師であり続けながら、問い続けることのできる文化条件を回復するための場である。そう考えるようになりました。実践を教えるのではなく、実践を語り合う。答えを与えるのではなく、問い続けることを支える。同じものをつくるのではなく、それぞれの場所で新しいものが生まれる余白を守る。これが現時点における私自身の協働探究 RT という試みについての理解であり、到達点です。

学校文化や実践コミュニティは大切です。しかし、教師が直面している現実を考えるならば、そう語る

だけでは不十分ではないか。その前にあるものから考えていく必要があるのではないか。教師が教師でありながら、問い続けることのできる文化条件をどのように回復していくのか。協働探究 RT の試みは、この問いへの一つの応答であると考えています。

今年の協働探究 RT の準備を進めています。探究課題は「呼ばれることと応答すること」になる予定です。ホスピタリティとケアを手がかりとして対話しようと考えています。2026 年 10 月 24 日、札幌を基幹会場として、奈良会場、静岡会場を結んで開催します。可能であれば福井会場も加えたいと考えています。

会場に集まってもらい対話をする。そこで出されたものをつなぎ合わせながら展開していきます。各地域やそこに集まった一人ひとりの個性を活かしあいながらの展開です。どのような場になるのか、私にもまだ分かりません。しかし、だからこそ楽しみにしています。これまでも協働探究 RT は、準備した答えに向かう場ではなく、参加者との出会いの中から新しい問いが生まれる場でした。今回もまた、そのような場になることを願っています。

もしこの文章を読んで、「少し気になる」「一度参加してみたい」と思われた方がおられたら、ぜひお声かけください。私たちは答えを準備して待っているわけではありません。協働探究 RT は、完成された実践ではありません。むしろ、私たち自身が問い続けるために必要としてきた場です。これからも新しい人との出会いによって変わり続けていくのだと思います。

(1) 2021-2024 年度に開催した「協働探究 RT」は「NITS・教職大学院・教育委員会等コラボ研修支援プログラム事業」の助成を受けた。各年度の報告書は、<https://www.nits.go.jp/service/collabo/>に掲載している。なお、幼児教育をテーマとした協働探究 RT を除いた探究課題は以下のとおりである。「チームで仕事をするとは？」(2021 年)、「仕事の美しさとは？」(2022 年)、「21 世紀を生きる人間像とは？」

(2023 年)、「直観的判断力が切り開く世界とは？」
(2024 年)、「学びへのまなざしを問い直す」(2025 年)。

(2) 本稿は私自身の経験をもとに記したものである。奈良 RT や協働探究 RT については、修了生の長期実践研究報告書もある。それぞれ異なる視点からここで言及したさまざまな RT の経験が語られている。あわせて読んでいただければ幸いである。

①奈良 RT については、黒津彰紀「あなたと『ともに』紡ぐ」(No. 478, 15-17 頁)

②札幌 RT については、西野功泰「『本物の体験』を創り出す教師となるために」(No. 382, 126-140 頁)

③静岡、奈良女子大学附属幼稚園、奈良で開催した協働探究 RT については、小泉真由子「つながりを求めて」(No. 578, 124-152 頁)。ここには参加した生徒の語りが掲載されている。

④札幌 RT、協働探究 RT については、号刀悠貴「あなたと働きたい」(No. 635, 39-43 頁)

(3) 『月刊高校教育』については以下を参照。

①荒瀬克己の「おとなの探究基礎」第 81 回 『希望』
(2021 年 1 月号、52-55 頁)

②荒瀬克己の「おとなの探究基礎」第 93 回 「アラセ自問する」(2022 年 1 月号、50-53 頁)

福井大学連合
教職大学院
東京サテライト



沖縄県宮古島市
教育委員会・
沖縄県教育委員会
東京都三宅村教育委員会

DEAL

(Deep Active Learning)

教職員研修 & 宮古島ラウンド テーブル・コラボ研修

「教職の理論と実践の融合」をテーマに、教員研修の在り方を問い直し、子どもたちの学習観の転換を図り、子どもたちによる主体的な学びを支えるための専門職としての教師の学びを検討する。フィールドワークとラウンドテーブルを通じて、地域、職種、学校種を超えた参加者同士が対話し探究する。

2026 8.20~21
THU FRI

OPEN 8:40~ START 9:00-16:45

場所 沖縄県宮古島市内、宮古島市役所大ホール
8/21午前のみ、ハイブリット開催

対象 全国の教員、教育委員会、教育関係者、
大学関係者、一般企業、他

受講無料 | 定員 100名

申込 申込期間：令和8年6月15日～8月10日

※定員に達し次第締め切ります。

QRコードまたは下記URLのフォームにて申込み

URL：https://forms.gle/ML5hLJdehqytUsi1A



子どもたちの探究を手がかりとした、
教師としての力を育む協働探究
～教師の主体的で対話的、そして深い
学びを実践する道を描く～



8/20 Session1 フィールドワーク

宮古島探究コースの フィールドワーク

宮古島や伊豆七島（三宅島）の中学校の生徒たちが考案した「宮古島を巡るコース」をグループで廻ります。参加者はバリアフリー視点も含めた探究ポイントを加え、島を巡る新しい学びを共創します。

8/21 Session2 ラウンドテーブル

宮古島ラウンドテーブル

子どもたちの実践発表と探究コースの報告をもとに、子ども達の主体的・対話的で深い学びや協働探究について考察、共有します。また、相互の実践を語り、傾聴し、子ども達の学びを支える教師の学びのあり方を検討します。

8/21 Session3 フィールドワーク

島の小中学校跡地を巡る 実地研修と自己省察

大神島の大自然の中で、小中学校の校の跡地を巡り、教育とは何か、教師の喜びとは、学びの質とは何かを自分自身に問いかけ問い直します。これまでの自分と向き合い、省察しこれからの展望を開きます。

主催・福井大学連合教職大学院東京サテライト 共催・宮古島市教育委員会・教育研究所

お問い合わせ

福井大学連合教職大学院東京サテライト（千葉）



tokyo.satellite2020@gmail.com

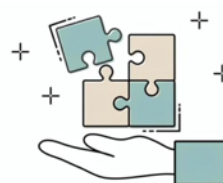


その他

Schedule (7月～9月)

7/11 Sat.	7月月間合同カンファレンス A 日程
7/18 Sat.	7月月間合同カンファレンス B 日程
7～8 月	夏期集中講座 Cycle1(a:7/25,26,27), (b:7/28,29,30) Cycle2(a:8/1,2,3), (b:8/4,5,6) Cycle3(a:8/8,9,10), (b:8/17,18,19) Cycle3(c[予備日]:9/19,20,21)

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_n1@yahoo.co.jp までご連絡ください。



【編集後記】

本号では、学校マネジメントコース 1 年履修の院生からの熱い抱負、月間・週間カンファレンスやインターンの報告が寄せられました。また、特集として関西・東京からのラウンドテーブルの報告・告知を掲載いたしました。今年度が始まって早 3 ヶ月が経過しました。各々の実践のスタートを切ったかと思いますが、夏休みという区切りを前にした今、改めて皆さまと実践を考えていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

(2026 年度 Newsletter 担当一同)

教職大学院 Newsletter

No.209

2026.7.25 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukuiflagship@yahoo.co.jp